謹賀新年

京都 平安京の天門

御神忌 千百二十五年

未来へつなぐ誠の心

半萬燈祭

令和9年 2027

天満宮

題字／後西天皇御宸筆

特集

◆天正の「北野大茶湯」の縁を今に伝える
献茶祭、厳かに斎行　藪内家燕庵 藪内紹智宗匠ご奉仕

◆天神さまと私 ――――――

日本文化の中心地 京都
その文化の礎を築いた天神信仰発祥の社

北野天満宮の由緒

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国天満宮・天神社一万二千社の宗祀（総本社）の神社です。

天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天暦元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の天門にあたる北野に御鎮座致しました。天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満大自在天神」の神号を賜り、さらに皇室・朝廷の崇敬を受け二十二社に加えられ、臣下として初めて官幣中社に列格、皇城鎮護の神として崇められるとともに、天満宮・天神社の総本社として崇敬されてきました。

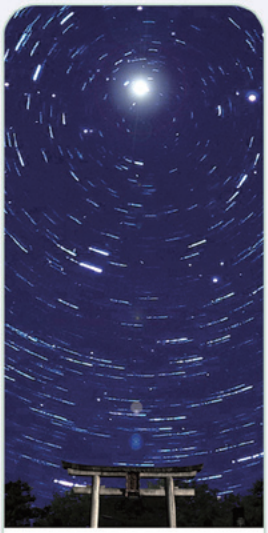
創建以来、皇室との御縁深く、寛弘元年（一〇〇四）には一條天皇がはじめて北野社に行幸されました。以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、さらに将軍家や有力大名の崇敬を受けました。菅公薨去延喜三年（九〇三）より凡そ百年の歳月をかけて誕生した北野の天神信仰は、平安京の天門にあって、朝野を問わず人々の暮らしの最も重要な指針となり今日まで育まれてきたのです。

「文道大祖 風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されるとともに、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民に至るまで「天神様」として親しまれてきました。菅公は、学者・政治家また詩人・教育者として多方面に活躍され、生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生き続けています。

千有余年に亘る歴史の中で受け継がれてきた天神信仰の根本を示すのが、当宮所蔵の国宝「北野天神縁起絵巻」承久本です。数ある縁起絵巻の中で唯一無二の神社絵巻物であり、その信仰性や描かれる世界観、美術的価値は世界が認めるところであります。

また現在の御社殿は、豊臣秀吉公の遺命により豊臣秀頼公が片桐且元を奉行として、慶長十二年（一六〇七）に造営された一大建築群です。御本殿は八棟造（やつむねづくり）と称され、国宝の指定を受ける桃山文化の代表的建築です。その絢爛豪華さは謂うまでもありませんが、特に多数の桃山建築中でその創建当時の規模そのままに保存されているのは当宮が唯一のもので、後世の権現造の原型となるなど、神社建築史に多大な影響を与え続けています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神様として今日も多くの参詣者が訪れています。



京都 平安京の天門

【シンボルマーク】

平安京の天門に位置する北極星を星梅鉢と鳥居（北野）で捉えたマーク。北野は千二百年に亘り、国都として文化を育んだ平安京にて、天の神々の出入口「天門」に菅原大神が奉祀された聖地です。爾来、北野の地より全国に天神様の御神威が益々昂揚していきました。

表紙写真　―京都の名勝　雪月花の三庭苑　梅苑「花の庭」―

京都随一の梅の名所として親しまれる境内梅苑は、江戸時代、歌人・連歌師であり貞門俳諧の祖と仰がれた松永貞徳作庭の「雪月花の三庭苑」で名高い、清水寺の「月の庭」、妙満寺の「雪の庭」と共に、北野の「花の庭」として名を馳せ、蘇った現在も多くの人々を魅了する。

謹賀新年

文化は融合して発展する「和魂漢才の精神」を次世代に

菅公の「和魂漢才の精神」に倣い全国で唯一和漢朗詠形式で斎行される曲水の宴

年頭にあたり、謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄を言祝ぎ奉り、国家の隆昌と氏子崇敬者皆様方のご健勝とご多幸を衷心よりお祈り申し上げます。

扨、境内では早咲きの梅がつぼみを膨らませ、ちらほらと咲き始めて参りました。来る令和九年三月の菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭の斎行まで愈々二年に迫り、氏子崇敬者皆様のご理解とご奉賛のもと、準備も着々と進んでおり、重ねて御礼申し上げる次第でございます。

思い返せばこの十数年、「文道大祖 風月本主」と崇められ、詩人、歌人としてその才を発揮された菅公を顕彰し、天神信仰の更なる発揚と御神霊の平安を祈るため、途絶えていた神事を再興し、様々な文化行事を執り行って参りました。

古来、「聖廟」と呼ばれた当宮では、様々な芸能によって御祭神を慰霊することを「聖廟法楽」と称しました。御祭神をお慰めする連歌会が春秋二回、紅梅殿で張行するのは今や恒例となり、境内では、子どもたちの百人一首大会や将棋大会の場となり、七夕や紅葉、梅花の季節には、和太鼓や笛、管弦楽器の演奏、落語や舞踊の奉納等々、挙げれば枚挙にいとまがないほど、多くの奉納神事を行なって参りました。当宮では、その歌舞音曲のひとつひとつが、御祭神を慰める「法楽」に繋がるものとして考え、御祭神の御心の安らかならんことをひたすら祈り続けております。

昨年、江戸時代の天皇や公家衆らの詠んだ約二千首の和歌が『北野聖廟法楽和歌』として重要文化財に指定されました。まさに当宮では、信仰と文化が表裏一体のものとして形となり、二十一世紀の今もなお、受け継がれているのであります。

日本は、お茶や文字など様々な文化が中国から伝播しました。当宮ゆかりの天正の北野大茶湯に代表される茶の湯文化も、その始まりは大陸より伝来したものであります。これら異国の文化は、日本人の豊かな感性により、お茶は茶道につながり、文字は漢字から平仮名ができ、和歌が生まれるなど、我が国独自の進化と発展を遂げてきました。「文化は融合して発展する。」これは、縄文より受け継がれてきた日本人の精神を大切にしながら、外国の進んだ文化や技術の取り入れを是とされた和魂漢才の人、菅公の想いであり、次世代に伝えていかなければならない精神であります。

当宮は至る所に日本の伝統文化が息づいています。本年は「大阪・関西万博」も開催されます。万博を機に、海外の方々を始め、国内外の人々に天神信仰の一端に触れて頂き、日本文化の素晴らしさを感じて頂けるよう、職員一同、心を込めて参拝者の皆様をお迎えしたく存じます。

御神縁深き皆様には、本年も天神信仰の発揚と天満宮護持のため、倍旧のご厚情を賜りますようお願い申し上げ、年頭のご挨拶と致します。

令和七年 乙巳 元旦

北野天満宮
宮司 橋 重十九

天正の「北野大茶湯」の縁を今に伝える

献茶祭、厳かに斎行　藪内家燕庵　藪内紹智宗匠ご奉仕

天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉公が当宮境内北野松原で開催した「北野大茶湯」を由縁とする献茶祭を十二月一日午前十時から御本殿において多くの関係者が参列される中、厳かに斎行した。

御神前でのご奉仕は、在洛の四家元・二宗匠（藪内家・表千家・裏千家・武者小路千家・堀内家・久田家）が輪番で務められるのが慣例となっており、今年は藪内家燕庵家元がお当番。藪内紹智宗匠が、御祭神と豊太閤を祀る末社豊国神社に献ずる濃茶・薄茶を二碗ずつ点てられた。

御神前に濃茶・薄茶が供えられた後、宮司が恭しく祝詞を奏上した。そして玉串を捧げた後、藪内紹智宗匠、席主代表として小川豊氏、献茶祭保存会代表として橋本健太郎氏、参列者代表として古城紀雄氏が次々玉串拝礼され、御本殿での祭典を終えた。

西廻廊には特別観覧席が設けられ、紹智宗匠のお点前の様子などがモニターに映し出されており、これを見守る社中の人や一般参拝者も多数いた。

献茶ノ儀（藪内家　藪内 紹智宗匠ご奉仕）

豊国神社でも献茶祭斎行　境内の拝服席・副席は茶人で賑わう

御本殿での祭典の後、紹智宗匠らは祭員の先導で豊国神社に参進。権宮司斎主による献茶祭が斎行された。

この日、風月殿大広間に拝服席（燕庵）が、また、同奥の間（燕庵社中）、明月舎（竹風会京都支部）、上七軒歌舞練場（上七軒お茶屋組合同芸妓組合）、松向軒（松向軒保存会）による副席が設けられた。

この日は、師走入りとは思えないほどの好天に恵まれ、もみじ狩りの参拝者も多く、とくに風月殿前などは着飾った茶人や愛好家で大賑わいを見せていた。

「寂」を菓題に珠玉の一品を展示　菓匠会、今年も献茶祭に協賛

京都の老舗和菓子店で組織する「菓匠会」は、今年も献茶祭に協賛し、この日絵馬所で飾り菓子の展示会を開いた。

「菓匠会」は、江戸時代の禁裏御用達「上菓子仲間」の流れをくむ京都の老舗和菓子店で組織され、毎年課題を決め、各店がそれに沿った珠玉の一品を展示し、お茶とともに発展してきた京都の和菓子の

宮司祝詞奏上

豊国神社献茶祭

副席　燕庵社中

副席　上七軒お茶屋組合・上七軒芸妓組合

献茶祭保存会役員以下御参列（渡辺孝史氏・橋本健太郎氏・山本源兵衛氏・畑正高氏）

副席　竹風会京都支部

副席　松向軒保存会

拝服席　燕庵

飾り菓子の美しさに見入る参拝者

素晴らしさを披露している。

今年の菓題は「寂」。各店がそれに沿って「冬の帳」「しんしんと」「冬の夜」などなど思い思いの菓題をつけた素晴らしい一品を展示し、多くの来場者を魅了した。

本家玉壽軒「冬めく」

菓匠会一覧

信房屋
吉良善
駿河屋陸奥堂
鶴屋
鍵善斗町
先斗町
亀屋久末
長亀
亀屋良壽
本家玉壽
千本家
塩芳
笹屋伊廣
亀末
亀屋清若
二條
嘯亀屋狭月
永良

長久堂「雪中松柏」

亀屋陸奥「美しく」

茶湯と連歌に見る菅公との繋がり

藪内家の流祖藪内剣仲紹智は、戦国時代の茶人武野紹鷗の弟子であり、兄弟子の千利休居士とともに武野紹鷗門下で侘茶を学んだ。

武野紹鷗は堺の商人でありながら、連歌師・茶人としても高名な人物で、千利休居士は生前「術は紹鷗、道は珠光より」と語ったとされるなど、後世に多大な影響を与えた。

当宮御祭神菅公は、宇多天皇の勅命により編纂した史書『類聚国史』において、「茶」についての項目を設け、茶の研究を重ねられた。また神仏に茶を捧げる「献茶」や喫茶の文化を世に広めるなど、茶湯文化興隆にも尽力され、「茶聖・茶祖」と敬仰された。

そのような菅公の御事績を讃えるかの如く、千利休居士も辞世の句に、菅公を偲ぶ和歌を遺すなど、後世の茶人らの篤い信仰を集めたのである。

「文道大祖 風月本主」と崇められる菅公の中核は連歌や和歌であり、侘茶や茶湯の概念は、当時の連歌師たちによって生み出されたことを考えると、先人たちの当宮への茶の信仰は、必然かつ不可欠だったのである。

献茶祭に先立つ神事も古式ゆかしく

御本殿で御茶壺奉献奉告祭、口切式厳かに　茶摘み娘先頭に御茶壺行列、華やかに

献茶祭保存会役員奉仕による口切式（橋本健太郎氏・畑正高氏）

宰領渡辺孝史氏による碾茶の見知

献茶祭に先立って十一月二十六日午前十一時から御本殿において、献茶祭に使われる抹茶の原料である碾茶（てんちゃ）を奉献する御茶壺奉献奉告祭並びに口切式を厳かに斎行した。

碾茶の奉献は、慣例によって山城六郷（木幡・宇治・菟道・伏見桃山・小倉・八幡・京都・山城）の茶生産者と京都市茶業組合を始めとする茶業関係者によって執り行われる恒例の神事となっている。

お供えされる碾茶は茶産地ごとに御茶壺に入れた後唐櫃に納められ、一の鳥居から御本殿まで、紺の着物、姉さんかぶりの茶摘み娘を先頭にした御茶壺行列で賑々しく運ばれた。

行列により運ばれた御茶壺は御神前に供えられ、御茶壺奉献奉告祭が厳かに斎行された後、祭典に引き続き口切式が斎行された。御茶壺は居並ぶ献茶祭保存会の役員の元へ運ばれ、役員が一壺ずつ丁寧に口切りを行い、茶舟の上に青々とした碾茶を盛り上げた。茶船の碾茶は、献茶祭保存会宰領の渡辺孝史氏によって見知され、すべての神事を滞りなく終えた。

御神前に並ぶ茶壺と碾茶

古式ゆかしく御茶壺行列が参道を進む

かつての桜の名所復活

菅公御歌
桜花 主を忘れぬものならば
吹きこむ風にことづてはせよ

舞楽図　満開の桜の境内を描く

桜の名所・吉野からしだれ桜の奉納
御本殿で奉納奉告祭、船出の庭で献木式

嵯峨天皇大同二年（八〇七）、北野の地に開かれた右近の馬場は、桜狩りが度々行われ謡曲「右近」でも桜の舞台として謡われるほどの名所であった。菅公御歌「東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな」の梅の歌はあまりにも有名だが、同時にもう一首「桜花 主を忘れぬものならば 吹きこむ風にことづてはせよ」と桜に思いを託した歌も遺され、梅同様に桜花にも御心を寄せられていた。

この度、御神縁により千本のしだれ桜で知られる奈良・吉野「高見の郷（奈良県吉野郡東吉野村杉谷）」から見事なしだれ桜の成木二本が奉納の運びとなり、十二月六日午前十一時から御本殿にて献木奉納奉告祭が、また桜が植樹された紅梅殿船出の庭で献木式がそれぞれ斎行された。「来春には咲く」との見通しで、梅花との〝雅やかな競演〟も待たれる。

しだれ桜を奉納されたのは、「高見の郷」代表の島崎章氏。高見山のしだれ桜は、現在千百本に増えており、毎年、桜の時期には大勢の観光客で賑わう。

二年ほど前、高見山の桜の上に龍神そっくりの雲が現われ「山に龍神さんが降りてきた」と感動した島崎氏は、龍神桜と命名して奈良県内の龍神を祀る神社を始め、著名な社寺にしだれ桜の奉納を始めた。「他にも奉納したい」との意向を伝え聞いた当宮に御縁の深い京都産業大学名誉教授下出祐太郎氏が当宮を紹介し、この日を迎えた。

奉納されたしだれ桜「龍神桜」は、紅梅殿船出の庭と一の鳥居を入ってすぐ東側に植樹された。樹齢五、六十年、樹高十四メートルほどの立派な成木で、船出の庭での献木式では、島崎氏や宮司が植樹の儀を執り行った。

式典を終えて島崎氏は「龍神さんの不思議なご縁で、この度北野天満宮に奉納することが出来、大変うれしい」と話され、宮司も「北野天満宮はかつて桜の名所でもあった。今回、大変立派なしだれ桜が奉納され、菅公もお慶びと思う」と感動の表情だった。

北野曼荼羅図
下方に桜が描かれている

献木奉納奉告祭

御本殿にて島崎章氏に感謝状の贈呈が行われた

北野祭（きたのさい）再興 ―近代の北野臨時祭から令和の北野祭へ―

北野文化研究所　室長　松原　史
特別研究員　西山　剛

当宮所蔵の北野祭礼図絵巻

はじめに

当宮では現在令和九年（二〇二七）に行われる菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭に向けて境内整備と旧儀の復興、これに伴うさまざまな調査研究活動を行っている。その中核に位置付けているのが、祭列や神輿渡御、御霊会をともなう「北野祭」再興への道筋をつけることである。

平安の御代に起こり、中世には幕府の保護のもと大変な発展を見せた北野祭。荘厳な神輿渡御列、御霊会をともなう勅祭（天皇の使者参向のもと斎行される祭礼）としての北野祭は、応仁の乱を機に途絶して久しく、その後、幾度となく再興が試みられるも、果たされず現在に至っている。

北野祭の姿は、現在では九月四日に行われる例祭ならびに北野御霊会（令和二年、五五〇年ぶりに再興）、そして毎年十月一日から五日まで行われる「北野祭―瑞饋奉饌」、通称「瑞饋祭」と呼ばれてきた祭礼の渡御列の中に、その偉容の一端を垣間見ることができる。また、応仁の乱で失われた神輿の復興についても、令和九年の半萬燈祭へ向けて、「北野神輿」の再興を目指している。

本号では、北野祭の歴史―その様相と中断、失われた神輿に関して改めて繙くとともに、歴史上最も北野祭再興に近づいた幕末・明治の神社内外の動きに関してもご紹介する。

近代北野祭復興への動き ―北野臨時祭から北野祭へ―

応仁の乱以来、最も北野祭再興に近づいたのが、幕末から明治の初めにかけてのことであった。当宮に残されている「宣命」（天皇の詔勅を記した漢文体の文書）と北野臨時祭関連史料からは、元治元年（一八六四）に北野臨時祭として北野祭が再興されてのち、明治五年（一八七二）に「臨時」が除かれ、明治六年までの間、「北野祭」として斎行するに至る動きが読み取れる。

宣命は、山吹色に染め上げられた厚手の和紙に墨書で記されており、末尾の日付は、以下のとおりである。

一、元治元年十一月十四日
二、慶應元年八月五日
三、慶應二年八月五日
四、慶應四年八月五日
五、明治二年八月五日
六、明治三年庚午八月四日
七、明治四年辛未八月四日
八、明治五年壬申八月四日

元治元年以外は、当初北野祭が斎行されていた旧暦の

宣命が納められた箱　箱書には「神記」と記されている

八月五日と、永承元年（一〇四六）以降、後冷泉天皇母・藤原嬉子の国忌と重なるため変更され祭日となった八月四日に合わせたものとなっている。慶應三年の宣命は見当たらないのだが、前年末の孝明天皇崩御に続く明治天皇践祚、大政奉還が行われるなど、幕末の中でも特に激動の一年であり、その関係で臨時祭自体行われていなかった可能性が高いと思われる。

また宣命は、明治五年までしか下されていないが、その後も明治六年までは、「北野祭」は執り行われていたようである。しかし、残念ながらその後、神祇省の廃止や政府の政策転換などの影響もあり、勅祭としての北野祭は再び途絶えてしまった。

元治元年（一八六四）北野臨時祭宣命

元治元年（一八六四）の宣命には、八通の中で一番充実した次のような内容が記されている。当時の世相を表した異国の脅威や政情不安を反映した描写とともに、「正應（一二八八―一二九三）（原文ママ）の御代より起こり、幾久しく絶えて再興を試みるもその願いが果たせてこなかった祭（＝北野祭）を執り行い、以後毎年の恒例とする旨記されている。

この時、幣帛を持つ使者とされているのが、従四位の少納言、文章博士の菅原朝臣修長公である。修長公は、菅公の六世孫菅原是綱を祖とする菅原家嫡流、高辻家の当主であった人物であると考えられる。折しも元治元年は、六月に池田屋事件、七月に禁門の変、八月には四国連合艦隊による下関砲撃事件が起こるなど、多くの重大な出来事が発生しており、その世相を受け、十一月に「五穀豊穣」「四海無事」「国内静謐」「玉體安穏」「公民快楽」を祈願している。

この臨時祭にあたっては、式次第や会場図など多くの史料が残されており、並々ならぬ思いで再興に至ったことが伺える。祭礼の日付や北野祭の起こりの年代など、記述に一定のばらつきが見られるものの、毎年の恒例とするという宣言通り、以後明治五年に至るまで（慶應三年を除き）、毎年勅使が差遣され、勅祭、北野祭が行われていたことは確かなことであったといえよう。

北野祭の歴史

応仁の乱で途絶え、幕末から明治初期にかけて一時再興された北野祭とはどのようなものであったのだろうか。以下で詳しく見ていきたい。

祭礼の成立―北野天満宮の祭礼とは？

現在、京都・北野天満宮の秋の祭礼といえば、毎年十月一日から五日間にわたって開催される「北野祭―瑞饋奉饌」、通称「瑞饋祭」と呼ばれてきた祭のことを指すといえるだろう。数ある京都の秋祭りの先陣を切って開催されるこの祭礼は、西京地域に居住する氏子を中心とした祭礼で、なかでも期間中、御旅所に安置される瑞饋御輿は中世以来の神供の性格を引き継ぎ、今でも保存会の手により、芋茎や各種の野菜を御輿型に取り付け、精巧に仕立てられている。人々がその年に作得した野菜・果物等を用いて御饌を作り、五穀成就の報賽を行うのがこの祭礼の意義である。

しかし、このような現行の祭礼は、前近代、とくに古代中世的なあり方としてそのまま引き移して考えることは難しい。では、古代中世おける北野祭礼はどのようなもの、どのような姿だったのだろうか。

北野祭の成立と式日の変更―朝廷が主催する北野祭

北野祭は、文献では永延元年（九八七）より始められたとされ、このとき「天満天神」の勅号（朝廷に認可された正式な神の名）が決定された。また、その後の展開は詳細に知ることはできないものの、十一世紀初頭には、朝廷（内蔵寮）から官幣（供物）が

奉られる公的な祭礼となっていたことが明らかとなっている。と同時に、この頃、祭礼は「北野天神会」「御霊会」とも称され、北野祭は御霊会（あらぶる疫神や死者の怨霊を鎮める祭）としての性格を帯びることとなった。

永承元年（一〇四六）に至り、後冷泉天皇母・藤原嬉子の国忌と重なるため、式日（祭礼が行われる日程）が八月五日から四日に改められ、それ以後、北野祭は四日に官幣をたて、五日に御霊会を行う祭礼となった。

祭礼の性格 ―北野の神輿（みこし）と神輿渡御（みこしとぎょ）

北野祭は、朝廷が主催する「公的祭祀」・「国家公的の性格」を持つ祭礼であり、平安時代後期には、神輿に祭神を乗せ、本社と西京にある御旅所とを往復する神幸祭の性格も持っていた。この時代、神輿は二基で、それぞれ大御前（祭神は菅原道真公）、三所皇子（祭神諸説あり）の神を乗せていた。神輿は華麗に飾られ、西京、大宿直の住民による鉾を先導に、伶人が楽を奏で、賑やかに渡御を行ったものと考えられる。いわば北野祭は、朝廷・神社・地域住民が協働して営む祭礼であったといえよう。

北野祭と朝廷 ―禁裏駕輿丁（きんりのかよちょう）が舁（か）く神輿

北野祭の大きな特徴の一つは、朝廷に所属する禁裏駕輿丁によって神輿が渡御されていたことである。彼らは、普段は朝廷の四府（左右近衛府、左右兵衛府）に所属しながら、天皇の行幸の際に、天皇が乗る輿を舁くことを務めとしていた。数ある神社祭礼の中で、天皇の輿を奉じる人々が神輿を担うのは、北野祭のみであったといえる。

ではどうして、天皇の輿を舁く駕輿丁たちが、北野祭の神輿をかついだのだろうか。このことを物語る、明確な史料は未だ発見されていないが、現在の研究では、北野天満宮を支える重要な膝下地域である西京に近衛府の下級官人が多く居住し、禁裏駕輿丁もここに含まれているためである、とする説が提出されており、またもう一つには、北野祭礼そのものが朝廷の主催する祭礼であるため、必然的に朝廷の官職である左右近衛府・左右兵衛府に所属する駕輿丁が呼び出されてくるため、とする説がある。

三年一請会（さんねんいっしょうえ）と西陣 ―「三年一請会」という儀式

もう一つ、北野祭の興味深い特徴がある。それは三年一請会とよばれる儀式が行われていたことである。十世紀半ばからはじまるとされるこの儀式は、三年に一度、祭礼で用いる神輿に点検を加えて修理が必要な部分のリストを作り、壊れたり、傷んだりした部材に修復を加えるものだった。いわば神輿の修理そのものが神社の重要な儀式として定着していたのである。

この三年一請会が史上最も安定して行われていたのは、十四世紀後半、ちょうど足利義満が将軍となり、室町幕府が絶大なる勢力を誇った時代だった。義満は北野天満宮への崇敬が篤く、各地の領地を北野天満宮に寄進するなどして、手厚く保護を加えた。三年一請会の安定的な実施もそれに関わるものと理解できる。

北野の神輿 ―染織品に彩られた西陣ならではの神輿―

北野の神輿の特徴は、その荘厳のあり方が、染織品に特化して行われていたことであるといえる。室町時代の史料によると、当時の北野の神輿は、堂を飾る御内帷子として牡丹唐草文を散らした綾織が用いられ、取り付けられる綱にいたっても、上包として唐綾織で覆われていることを知ることができる。彫りの施された金具も多用され、いわば北野社の神輿は、多種多様な織物類や刺繍裂、金具類によって飾られる工芸品の集合体であった。

定期的に三年一請会を実施することは、これら高等な染織加工品を定期的に製作することを意味する。そして、これら染織品を

生産したのは、北野天満宮に所属する大宿禰神人だった。彼らは、織物をもって朝廷に奉仕した織手たちの系譜を継ぎ、後の西陣の織手たちへとつながっていく。三年一請会による神輿装飾の更新は、彼らに連綿と製作の機会を提供し、これにより技術は格段に向上した。いわば北野の神輿こそ、京都の根幹産業であった西陣機業の発展を支えた重要な柱であったと考えられるのである。

応仁・文明の乱と北野祭の中断・神輿炎上

十世紀後半に成立した北野祭礼は、その後、四世紀の間で格段に発展を遂げた。朝廷の厚い加護が加わり、勅使が発遣される勅祭の性格を備え、室町時代には時の将軍家である足利家が保護をした。三代将軍足利義満が三年一請会を定期的に行い、北野の神輿を中心に、高等な技術を持つ職能民が集い、北野は都の中でも屈指の都市的な場へと成長していったのである。

ところが、応仁元年（一四六七）に勃発した応仁・文明の乱は、北野天満宮に多大な影響を与えることになってしまった。応仁の乱とは、応仁元年から文明九年までの十一年間、管領細川勝元の東軍と山名宗全、持豊の西軍が戦った内乱である。

この大乱により、北野天満宮の最大の後楯であった室町幕府が衰退。祭礼を遂行することもできなくなってしまった。

また文明五年（一四七三）には、北野の御祭神が東軍の本拠地である「御構」（北野天満宮の東、現在の京都御所周辺）に勧請され仮社に鎮座した。文明六年（一四七四）七月二十六日頃、北野天満宮の膝下領で突如武力衝突がおこり、住民である西京の人々は武器を帯びてこれに対処しようとしたが、西京一体が焼け野原になってしまう事態になった。これに際し、二基あった北野神輿は避難のため、御構の中に勧請された仮社へ入輿することになったという。

翌文明七年二月二十日夜、神輿がおいてあった仮社の北側にある寺院・安楽光院の中にある在家から火の手があがり、この火事で仮社は全焼、仮社にあった神体は無事に避難することができたが、神輿のうちの一基（三年一請神輿）はほとんど焼失し、「轅（ながえ）」だけが残ったという。避難させた神輿が、避難先で被災してしまうという悲劇が起こってしまったのであるが、三年後の文明十年六月二十八日、松梅院の母によって神輿は一定の再興がなされたと

令和6年10月30日　京都美山にて神輿材お祓いの様子

令和6年11月13日　長野南木曽にて長柄材お祓いの様子

神輿材切り出しの様子

ることとなってしまった。

長柄材に北野天満宮の焼印を押す
北野神輿会会長井上経和氏

焼印

の記録が残る。

しかし、内乱を経て北野祭の後ろ盾の消失、それに伴う北野の統治機構の変容も重なり、威容を誇った中世の北野祭はここに断絶す残された神輿古金具、同時代の遺構・遺物等を頼りに、現在、染織品に彩られた唯一無二の北野天満宮の「北野神輿」の再興を目指して制作を開始している。

再興する神輿の詳細に関しては、また別途ご報告させていただく予定だが、昨年秋、神輿の躯体の一部となる京都美山の檜材を切り出し、南木曽より十メートルを超える長柄用材として木曽檜を移送した。（前頁掲載写真参照）

令和の世に、中世の神輿を再興するという大変困難な挑戦ではあるが、荘厳と称された中世の北野祭再興に向けて、一歩一歩着実に取り組んでいく。

おわりに

中世の北野の様相、御神輿や渡御列の様子を雄弁に物語る文書、絵巻物、

【主要参考文献】

岡田荘司「平安京の祭礼・御旅所祭祀」（『平安時代の国家と祭祀』所収、続群書類従完成会、１９９４）

三枝暁子「北野祭と室町幕府」（『比叡山と室町幕府』、東京大学出版界、２０１１）

久米舞子「平安京「西京」の形成」（『古代文化』第64巻第３号、２０１２）

三枝暁子「ずいきみこしと西之京」（『京都　天神をまつる人びと』、岩波書店、２０１４）

西山剛「中世後期における北野祭礼の実態と意義」（『変貌する北野天満宮』、平凡社、２０１５）

佐々木創報告レジュメ「北野神輿の御構遷座と焼失　―文明六・七年の北野社」（中近世宗教史研究会、２０２２）

北野祭再興に向けて ―北野文化研究所　関連書籍のご紹介―

北野天満宮で行う旧儀の復興の際に、歴史的・文化的研究を担っている北野文化研究所より、北野祭と中世の形態を色濃く残す「北野神輿」の再興に向けて取り組んでいる研究員による新刊本のご案内をさせていただきます。

歴史、古文書、金具、染織等、様々な分野の専門家による知見をもとに、手仕事を受け継ぐ宮大工、錺金具、染織刺繍の職人たちとともに「北野神輿」を再興して参ります。

西山剛
『輿をかつぐ人びと　駕輿丁・力者・輿舁の社会史』
思文閣出版　２０２４

【既刊本紹介】

松原 史
『刺繍の近代
―輸出刺繍の文明交流史―』
思文閣出版　２０２１

自動車や自転車が未だ普及していなかった明治時代以前、輿は重要な乗り物でした。貴族、武士、僧侶から将軍や天皇までが輿を利用し、諸所へ移動していました。とくに天皇や将軍といった為政者の移動は大掛かりで、行幸や御行と呼ばれる儀式となっていました。

当然、このような輿にはかついで動かす人物たちが必要です。この「輿をかつぐ人びと」に焦点をあてて、平安時代から江戸時代までを通してその歴史像を追究したのが本書の内容です。なかでも天皇の行幸に際して輿を舁き、行列の中核をになう禁裏駕輿丁には多くのページを割きました。

もともと彼らは朝廷の機関である左右近衛府・左右兵衛府の四府に所属し任務にあたっていました。そして天皇の行幸に勤仕するという聖なる労働をもつ彼らには、諸役（関税や課税）免除の特権が与えられていました。

この性格により、十三世紀頃からだんだんと商人が参入するようになり、禁裏駕輿丁は室町時代には京都商業界を席巻する特権的な商業者集団になっていきました。貴族、武士に伍しつつ他の商人たちとの間で相論や訴訟を繰り返しながら商圏を広げていく駕輿丁たちの姿は、身分制度が色濃く残る中世という時代を考えるときに重要な意味をもつものと考えます。

本書の表紙は『北野天神縁起 承久本』（北野天満宮所蔵）のうち「朱雀院行幸」を使わせていただきました。禁裏駕輿丁は北野天満宮とも深いつながりを持つからです。実は、八月四日を式日として行われていた北野祭礼に際して、北野の神輿をかついだのはこの禁裏駕輿丁なのです。

そもそも北野祭礼は永延元年（九八七）八月五日 にはじめられたもので、次第に御霊会としての性格を強くしつつ中世に至りました。室町時代から足利幕府が主導する祭礼に性格を変化させ、これに合わせて北野社自体の祭礼に関する権限も強くなります。三年に一度、神輿の装束を点検・修理する三年一請会（さんねんいっしょうえ）という祭礼も安定して行われるようになり、室町時代こそ北野祭礼が最も安定的に遂行されていた時代といえるでしょう。そのような状況の中、禁裏駕輿丁は北野の駕輿丁として大御前神輿、皇子殿神輿という二基の神輿をかついでいました。

なぜ朝廷の駕輿丁が北野の神輿をかついだのか。そもそも北野祭礼とはどのような祭礼であったのか。本書ではこのふたつの課題にも取り組み、「第三章 中世後期における北野祭礼の実態と意義」「第三章補論 北野祭礼神輿と禁裏駕輿丁」の二編の論考も載せました。この二本の論考は本書で欠かすことのできない論考です。

半萬燈祭に向けて神輿や北野祭礼に関する掘り起こしが進んでいます。本書が、現在社内で実施される調査に少しでも資することがあれば望外の喜びです。

平安京の昔より、京都の地で育まれた「刺繍」という技術の近代における展開をひもとく一冊です。中世の北野の神輿は、多くの織物、刺繍裂によって荘厳に彩られていたといいます。その染織技術は受け継がれ、近代には新たなる展開を見せました。

近代の刺繍は海外への輸出という役割を担ったことで、制作体制や意匠、技術が大きく変化しました。西洋の室内を装飾するため、それまでにない形・絵柄・表現力が求められ、商人・職人らにより超絶技巧ともよべる作品の数々が生み出されます。

本書では国内外の王宮をも飾る日本の近代刺繍が花開いたおよそ五十年間について、現存する作品を網羅的に調査することで、刺繍産業の状況を具体的に描き出し、日欧間でどのような影響を与えあったのかを明らかにしました。

染織刺繍についての専門知識をもとに古文書を読み解き「北野神輿」の染織品を制作して参ります。

天神さまと私

書家、花園大学教授　日比野　博鳳　さん

今号は、長年にわたり当宮の新年行事「天満書」の審査に携わられている書家で花園大学教授の日比野博鳳さんをお迎えし、「天満書」のこと、書の心などについて宮司と話し合って頂いた。
（構成・編集部）

―三代続く「天満書」の審査

宮司　正月の恒例行事「天満書」の審査、毎年ありがとうございます。書道の神さまとしての信仰もある当宮の書き初めは、昭和初期から行われており、「天満書」として現在の形になったのは昭和二十七年の菅公御神忌千五十年の大萬燈祭の折、京都新聞と鳩居堂のご支援を受けて始まっていますが、その折、奔走頂いたのが祖父の日比野五鳳先生と承っています。そして、そのご子息の光鳳先生、さらに博鳳先生と三代にわたって審査に当たって頂いており、「天満書」の歴史は、日比野家と切り離せないのです。

日比野　そのように言われると恐縮します。

宮司　まずその「天満書」についての先生の思いをお聞かせ下さい。

日比野　多くの子どもたちが、正月の奉納に向けて練習します。それは単なるコンテストというより、お宮さんに奉納するのだ、という気持ちがないと長続きはしません。次の世代にもそういう気持ちを植え付けることも大事であり、それが伝統に繋がります。幸い毎年、たくさんの方の出品があり、うれしく思っています。

宮司　以前はあちこちの神社で書き初め展をしていましたが、大半、やめられてしまいました。当宮が長い間、続けてこられたのは、日比野家のお力添えのお陰だと感謝しています。

日比野　どの神社も書き初め展をしたい、という思いはお持ちですが、結局、正月の繁忙期だけにそれに関わるスタッフがおらず断念されているようです。

宮司　当宮としては絶対にやめてはならない正月行事ですので、たくさん奉納して頂くことを願うばかりです。ただ、一年で一番寒い頃なので、吹き曝しの中で審査して頂く先生方のご苦労を思うと、大変だろうと思います。

日比野　子どもたちが真剣に書いた作品を真正面から見ることが大切なので寒さは気にはなりません。かなりレベルの高い書き初め展であることは間違いないので、我々も真剣です。

宮司　五鳳先生、光鳳先生と、文化功労者の書家でした。そんな家に生まれられたのですから、跡を継ぐのは当然だと思われていたんでしょうね。

日比野　僕の場合、書というものが我が家の職業である、ということに気づく前に筆で字を書いていました。幼稚園児ぐらいから祖父五鳳の家に

正月恒例の天満書で審査をされる日比野先生

出向いて祖母から五鳳の書いた字を手本に字を習っていました。しかし、そのうち字を書くことの意味がわからなくなり、長い間筆を持たずにおり、再開したのは大学を出てからです。心の底に字を書く楽しさ、面白さが宿っており「これは繋げていかねばならない」と、思ったからです。父の光鳳も一度会社勤めをしており、同じ道を辿っています。これも伝統の重みなのかもしれません。

宮司　なるほど、以前絵画の先生とお話しした時にも同じようなことを仰っていました。一度挫折したが、また、その道に戻ったと。

日比野　親から子、子から孫という形で、何となくその姿を見ているうちに、それが伝わっていく。こういうことが京都千二百年の伝統なのだと思っております。

―「天満書」で筆を持つことは日本文化の継承に繋がる

宮司　まさに道の世界ですね。「天満書」の話しに戻りますけれども、一月二日、「天満書」に先駆けて御本殿で、菅公御遺愛と伝わる硯などをお供えして「筆始祭」という祭典を斎行します。書の三聖といわれた菅公を偲び、書に親しむ人たちの技術向上を祈り、「本年も天満書を行います」と、御祭神に奉告します。ですから「天満書」は単なる書き初めではなく、天神信仰として途絶えることがあってはならないのです。先生は、いつも神前で筆を持つことの意義を説かれていますね。

日比野　日本人は縄文の昔から日本語を話してきました。そのうち文字を使うようになり、文字で記録できるようになった。中国から来た文字をアレンジして日本語にあてはめ、仮名文字を使うようになり、漢字と仮名を組み合わせて日本独自の文字表記を編み出したわけです。もし、日本人が中国で発明された漢字しか使わなかったら日本は中国の属国になっていたと思います。しかし、自国の言語を自国の文字で記録することが出来たため、日本文化は廃れることなく続いた。なので子どもたちが「天満書」で筆を持つことは、日本文化を次に繋げることになると思っています。

宮司　私は常々、縄文からの〝ことだま〟が今に繋がり、日本人の文化的遺伝子となっている、といっていますので、先生のお話、納得することばかりです。加えて申しますと、当宮の御祭神菅原道真公（菅公）は「心だに誠の道に叶いなば祈らずとても神や守らん」という御歌を遺されておられますが、この和歌に古来、日本人が縄文時代より受け継いできた精神が謳われており、天神信仰の原点が見えると思っています。この和歌は、常日頃、清き明き誠の正直な心を堅持すれば、たとえ祈らなくても神明はご加護を下しおかれるものであるとの信念を吐露されたものであります。清廉潔白なお人柄で「和魂漢才」の精神を以て、輝かしい功績を遺された菅公が提唱する「誠の心」とは、まさしく連綿と継承されてきた縄文人の美的感受性から生ずる「神の心」、それは「縄文の心」そのものであり、平安期における国風文化の礎となったと考えています。当然、「言葉」や「書」にもその精神は脈々と受け継がれ、日本文化の土台にもなってきたと思っています。さて、書の三聖の一人ともいわれた菅公ですが、残念ながら直筆は遺っていません。しかし、平安後期には非常にすぐれた書家として評判になり「菅公神筆」なるものが珍重され、室町中期の公家で学者の一条兼良もその著書の中で、書道の名手だと讃えています。江戸時代、全国に広がった寺子屋では天神像を飾り、習字コンクールをしていたところもあるそうです。菅公は日本人の心を大切にしながらも外国の進んだ文化を取り入れることを是とされた和魂漢才の人。書聖といわれた中国の王義之（四世紀の書家）の書にも学ばれたと推測しています。

日比野　当然、王義之の書に学ばれています。

宮司　その王義之ですが、

現代に至るも影響力を持つといわれますが、どんな人で学ぶべき点は？

日比野　王義之は、わかりやすく言えば、書道の世界におけるイエスキリストです。過去に歴史はあったけれども、その一人が出たため、世界はそこからガラッと変わり、その人を中心に広がってきたという意味ではイエスキリストです。

宮司　まさに教祖のような人ですね。

― 王義之が日本の書に与えた影響

日比野　王義之という人は、東晋時代の貴族の息子で、子どもの頃から字が上手でした。四十七歳で公職を退き、自然に親しみながら字を書きました。彼の名を有名にしたのは唐の時代の皇帝太宗で、王義之の書が大好きで、全土からその書を集めました。「蘭亭序（らんていじょ）」という有名なものがありますが、そのコピーを幾つも作らせ「みんなこれで勉強せよ」とばかりに全土に配布したのです。その一部が日本にも渡ってきたといわれています。

宮司　先ほども申しましたが、菅公の直筆は遺っていませんが、江戸時代には直筆と伝えられるものが遺っており、王義之の書体に似ていたと聞き及んでいます。

日比野　そうだと思います。正倉院には、「喪乱帖（そうらんじょう）」（国宝）という有名な書があり、奈良時代には、すでに王義之の書は日本に入っています。奈良・平安時代の貴族はこぞって王義之の書を学びました。空海や最澄の字にも王義之そっくりのものが出てきますし、菅公の字が王義之に似ているというのは当然です。王義之の書いた草書体が崩れて平仮名になったので平仮名の祖先は王義之です。極端なことを言えば、王義之なければ日本の書はないのです。

宮司　そうなんですか。そんなことは何も知らぬまま中国の著名な書家として王義之、王義之と、その名を呼んでいました。

― 形のない心を表すものが書

日比野　縄文人しかいなかった日本に、中国大陸からやってきた弥生人が稲作とともにさまざまな文物を伝え、文化が融合していったのですが、原始的な日本人固有の部分は生活習慣など、どんどん進化していきます。五・七・五・七・七の和歌のリズムが確定したころ以降、大陸からやってきた文字をあてはめて言葉を表記していった。その時、使われた文字は万葉仮名と言って、今も変体かなとして使われています。

宮司　万葉と聞けば、私どもすぐに考えるのは『万葉集』です。菅公は万葉歌人ではなく後代の人ですが、数多くの和歌や詩を創られたすぐれた歌人・詩人でもあります。『小倉百人一首』にもある「このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」の石碑が御土居の入り口に建てた時の話が先号（秋号四十一号）に出ていますが、あれは光鳳先生の字であり、もみじ苑に入る多くの参拝者の目にふれており、改めて御礼申し上げます。

日比野　ありがとうございます。

宮司　岐阜にはおじい様の名前を入れた記念館があると伺っています。

日比野光鳳氏揮毫の屏風

日比野　五鳳の作品を集めた美術館で、一九八四年にできました。場所は代々日比野家が住まいした、我が家の郷里の安八郡神戸（ごうど）町。この町役場の庁舎の横に、京都の門下の人たちがお金を出し合って建てたもので、神戸町日比野五鳳記念美術館といいます。つい先日、四十周年の記念イベントを行い、私も五鳳という書家が、どういう考えで作品創りをしたか、講演で話してきました。

宮司　私もそちらの方に行く機会があれば、ぜひ訪れてみたいです。花園大学で先生もされていますね。

日比野　ええ、花園大学というのは妙心寺系の大学です。妙心寺というのは花園天皇が関わられた禅宗のお寺で、京都の文化にとっては大きな拠点の一つです。禅宗のお坊さんにとっては昔から墨跡も大事であり、書道コースができました。そんな経緯から最初は禅宗の書が主力でした。しかし、やはりもっと体系的に広く書の文化を学びたいということから、毎年全国から学生が応募してくれています。

宮司　またまた「天満書」の話しになりますが、毎年審査されていて審査の核心といいますか、いつもどんなことを心掛けておられるでしょうか？　また、書に親しむことの良さも教えて下さい。

日比野　祖父も同様のことを申しておりますが、書は文字という形あるものを使って書くものだが、実は本当に表しているものは形のない心、これを書という形で表しているということになります。ですから、子どもたちの真摯な気持ち、真っすぐな気持ちが表れているものに惹かれます。中高生や成人の方の作品に、面白おかしくとか雑なものが時折見受けられますが、そんな作品は審査していて、その人の心が形になっているのかな、と思ってしまいます。繰り返しますが、心を打つ作品、いいなと思う作品は、書いた人の心が素晴らしいということに繋がります。それは言ってみれば菅公のお仕事、菅公の生きざまに繋がるのかなと、いつも思いながら審査させて頂いています。

史跡御土居のもみじ苑内に奉納されている日比野光鳳氏揮毫の歌碑

宮司　ありがとうございます。菅公は、学問の神、芸術や芸能の神として信仰があるだけなく、誠の人、正直な人であり、それ故、正直の神としての信仰も根付いています。新一万円札の顔となられた日本資本主義の父、澁澤栄一翁も菅公の信奉者であり、その著書の中に先ほども申し上げましたが、私の大好きな菅公の歌「心だに誠の道にかなひなば　祈らずとても神や守らん」を取り上げて、自らもこの気持ちを持続させていこうと決意されています。

―書くことで自分自身が大きくなっていくことを念頭に出品を

日比野　言葉を重ねますが、「書」というものは、心を真っ直ぐにして、真正面から紙に向かっていくことが大切で、不真面目な気持ちやルール違反する人生では良い文字は生まれません。今の時代むずかしいかもしれませんが、よく生きることが「書」にとっても重要になるので、明るく楽しく過ごすことも肝要です。お子さまをお持ちの方は、そういう気持ちを是非伝えいただきたいと「天満書」の審査員の一人としてお願いしたいと思います。

宮司　「天満書」に臨む子どもたちだけでなく参拝の若者たちにも通じるお言葉として承りました。ありがとうございました。

日比野　博鳳（ひびの　はくほう）略歴

一九六〇年　京都市生まれ
一九八三年　同志社大学文学部哲学科卒業
一九八八年より京都教育大学附属高校、龍谷大学、同志社大学（現在も）、京都府立大学、京都大学文学部講師を歴任。
二〇一四年　花園大学文学部、講師より教授に就任
二〇一七年　日展東京都知事賞を受賞
二〇二一年　日展文部科学大臣賞を受賞
現在　日展特別会員　全日本書道連盟理事　読売書法会常任理事　日本書芸院常務理事
京都書作家協会理事長　水穂会会長　など

「きょうとまるごとお茶の博覧会実行委員会」

紅梅殿船出の庭で賑やかにプレイベント
大阪・関西万博に合わせ京の茶文化を世界に

京都が誇る茶文化を世界に

「きょうとまるごとお茶の博覧会実行委員会」（京都府・京都市など主催）は、来年度開催する同博覧会のプレイベントとして十一月十日、古くからお茶に縁のある当宮で「大阪・関西万博プレ・オープニング」を開催した。万博を契機に京都の茶文化を世界に発信し、お茶の博覧会の機運を盛り上げようとの試み。紅梅殿船出の庭では、都倉俊一文化庁長官らを来賓に迎えてのセレモニーが賑やかに行われ、当宮の秋の「曲水の宴」もこれに呼応して開宴し、プレイベントを盛り上げた。

「きょうとまるごとお茶の博覧会」は、万博（来年四月十三日から半年間）の期間中に京都を訪れる人たちに茶文化を知ってもらおうと、府内の各地で茶会を始め茶の生産、茶菓子など茶にまつわる様々な催しを展開する。そして、その締め括りは来年秋、天正十五年、豊臣秀吉公が当宮境内で開催し、茶湯を日本を代表する文化へと昇華させた「北野大茶湯」にちなみ、当宮で茶会を開催する計画である。

この日のプレイベントでは、〝お茶の博覧会〟の機運醸成を狙って開かれ、PRブースが設けられた神楽殿前では、煎茶の飲み比べ会が行われ、終日、宇治茶を試飲する人たちで賑わった。また、風月殿では抹茶体験を行い、抹茶を楽しみながら静かに庭を拝観する人が相次いだ。

松井孝治京都市長

西脇隆俊京都府知事

都倉俊一文化庁長官

ダンスカンパニー「DAZZLE」によるパフォーマンス

上七軒歌舞会による日本舞踊奉納

都倉文化庁長官が祝辞
「万博を機に京都発で日本文化の良さを世界に発信したい」

プレセレモニーは、紅梅殿上に主催者の西脇隆俊京都府知事、松井孝治京都市長、来賓の都倉俊一文化庁長官、宮司らが並んで行われた。西脇知事は「北野天満宮は、天正の昔、身分の差なく茶碗一つで参加できる北野大茶湯ゆかりの地。半年間にわたり府内各地で茶会を始め茶に関する様々な催しを行った後、来秋、そのフィナーレの茶会をここで開催する」と挨拶された。また松井京都市長も「喫茶文化は九世紀に中国から入り、日本で独自の文化を形成した。京都の文化の神髄もそこにある。一服のお茶で世界平和が実現出来たら素晴らしい」と挨拶された。

また、来賓の都倉文化庁長官は祝辞の中で「来年の大阪・関西万博では、世界各国からたくさんの観光客がやってくる。懐の深い日本文化をより深く知ってもらうため、京都発で世界に発信していくため文化庁も頑張りたい」と述べられ、宮司も「日本文化、京都文化の素晴らしさが世界に発信され、世界中の人たちが京都に来られることを願っている」と祝辞を述べた。

参列者や大阪・関西万博の公式キャラクター「ミャクミャク」などのキャラクターも加わって記念撮影が行われた。

殿上では、DAZZLE（ダズル）によるダンス、上七軒歌舞会の舞妓による日本舞踊、神若会北野天神太鼓会による和太鼓奉納が行われ、プレセレモニーを盛り上げた。

訪日外国人も抹茶体験に訪れた

神若会北野天神太鼓会による和太鼓演奏

PR ブースは終日大変な賑わいを見せた

平安の雅、現代に再現

菅公顕彰の第十六回「曲水の宴」斎行
当宮独自の和漢朗詠、白拍子舞もたおやかに

第十六回菅公顕彰 曲水の宴 奉仕者

第十六回「曲水の宴」（同宴実行委員会主催）がプレセレモニーに引き続き紅梅殿船出の庭で催された。秋の宴は、十一月三日の文化の日の恒例祭事となっていたが、今年は「京都まるごとお茶の博覧会」のプレイベントに協賛する形で、この日の開宴となった。秋の好天の中で繰り広げられる平安の宴の再現に、魅了されていった。

「曲水の宴」は、庭を流れる小川に酒を入れた杯を流して飲み、兼題に即した詩歌を賦す雅な宴。中国から伝えられ、奈良・平安時代には宮中で盛んに催された。宇多天皇に重用された菅公は、天皇主宰の宴に幾度も招かれ、その時に詠まれた詩文も遺されている。

こうした故実に基づき平成二十八年十一月三日、紅梅殿船出の庭の完成に伴って「曲水の宴」が再興された。和魂漢才の精神を示された菅公を顕彰する意味を込め、和歌だけでなく漢詩も賦す「和漢朗詠」という当宮独自の形とし、かつて北野社にいたという白拍子の舞をも盛り込むという当宮の特色を織り込んだ形での再興は、すぐに評判を呼んだ。以後文化の日の恒例となっていたが、「他の季節にも…」という全国からの拝観者の声を受け、春にも催行されるようになり、今回で通算十六回目。

開宴にあたり、曲水の宴菅公顕彰委員会を代表し、上冷泉家当主の冷泉為人氏が「日本の歌と漢文の歌の二つで曲水の宴をやっておられるのが、北野天満宮の特色。これは和魂漢才の菅公の精神に基づくもの。好天で少し暑いですが、ゆっ

平安時代の雅な宴が現代に蘇る

上冷泉家当主 冷泉為人氏

第四詠者
戴 鑫源氏　黒須小夏氏

第三詠者
塩瀬隆之氏　花輪裕美氏

第二詠者
ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ氏　大原千鶴氏

第一詠者
若菜真丈氏　赤松玉女氏

くりご鑑賞下さい」と、挨拶された。

紅梅殿上で、菅公作の『花時天似酔（はなのときはてんもよへるがごとし）』が朗々と詠じられ、二人の白拍子が優雅に舞って参観者を雅な世界に誘った。この後、有斐斎弘道館館長の濱崎加奈子氏の解説で流觴曲水が始まった。平安装束に身を包んだ男女の詠者八人が入庭し、二人ずつペアになって流れに沿って座った。

漢詩を読む男性詩人は若菜真丈氏（京都駅ビル開発株式会社代表取締役社長）、ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ氏（大阪大学准教授）、塩瀬隆之氏（京都大学総合博物館准教授、大阪・関西万博政府日本館基本構想座長）、戴鑫源氏（立命館大学研究生）の四人。和歌を詠む女性歌人は赤松玉女氏（京都市立芸術大学学長）、大原千鶴氏（料理研究家）、花輪裕美氏（西行庵円位流当主夫人、パイプオルガニスト）、黒須小夏氏（作新学院高等学校二年生）の四人。兼題は「神」、「酒」、「紅葉」、「友」。

各氏は、流れてきた杯に口を当て、兼題に基づいた漢詩や和歌を色紙・短冊に筆でしたため、その作品を披講し、解説を加えた。

和魂漢才の菅公精神を継承し、国際色豊かな曲水の宴に　呉江浩中国大使も参列

御祭神菅公は、平安時代に唐の優れた学問や文化を積極的に取り入れ、宇多天皇とともに我が国の平安文化（国風文化）の発展に多大な影響を与えられた。菅公の提唱された「和魂漢才」の精神を受け継ぎ、当宮では全国唯一の「和漢朗詠」形式にて曲水の宴を再興し、文化の融合と菅公精神の継承に努めている。

今回、曲水の宴で詠者を務められた、ベルテッリ氏と戴氏は、それぞれイタリアと中国出身であり、披講に当たっては日本語だけでなく、それぞれの母国語でも披講された。

また、曲水の宴は顕宗天皇元年（四八五年）に中国から伝わったといわれており、本年は御神縁により呉江浩中国大使御夫妻をはじめ、多くの関係者等が曲水の宴に参列され、国際色豊かな曲水の宴となった。

童子（西田咲さん・新井ひかりさん・松山宗司さん・阿刀弘憲さん）

幻の芸能とも称される白拍子の舞

第十六回曲水の宴

一番　神

詩人　若菜真丈（京都駅ビル開発株式会社代表取締役社長）

神

高閣凌雲最近神
東西旅客往来頻
君看京洛駅楼盛
郁郁文華自此新

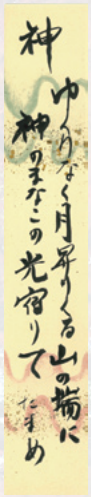
神

高閣　雲を凌いで最も神に近く
東西の旅客　往来頻りなり
君看よ　京洛　駅楼の盛んなるを
郁郁たる文華　此より新たなり

高い建物は雲を突き抜けて最も神に近づき、東西の旅客が頻繁に行き来している。見てごらん、京都の駅ビルのこの賑わいを、かおり高き華やかな文化はここから新たに発信されるのだ。

＊京都の玄関口であり文化の発信地でもある京都駅ビルの役目を全うしようと日々働く詩人がその想いを詠んだ詩。

歌人　赤松玉女（京都市立芸術大学学長）

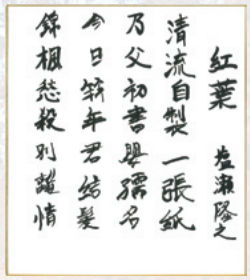


ゆくりなく　月昇りくる　山の端に　神のまなこの　光宿りて

＊歌人が自身の勤める大学より、東山からのぼりくる神秘的な月の様子を詠んだ和歌。

三番　紅葉

詩人　塩瀬隆之（京都大学総合博物館准教授／大阪・関西万博政府日本館基本構想座長）



紅葉

清流自製一張紙
乃父初書嬰孺名
今日笄年君結髪
錦楓愁殺別離情

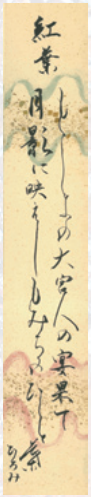
紅葉

清流自ら製す　一張の紙
乃父初めて書す　嬰孺の名
今日　笄年　君髪を結ぶ
錦楓愁殺す　別離の情

紙屋川の清らかな流れでみずから漉いた一枚の紙に、君の父親は初めて乳飲み子の名を記したものだった。今日、成年に達した君は髪を美しくたばね、独立の時も近い。その前撮りの場所に美しく紅葉したカエデが私を別れの思いに沈ませる。

＊詩人が天神様のもみじ苑での思い出をたどりつつ、我が娘の成長を寿ぎ、その感慨を詠んだ詩。

歌人　花輪裕美（西行庵円位流当主夫人／パイプオルガニスト）

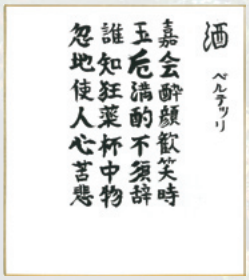


ももしきの　大宮人の　宴果て　月影に映えし　もみぢのひと葉

＊歌人が月を愛した西行に想いを馳せつつ、曲水の宴の果てに落ちていたもみぢの葉と月との情景を思い詠んだ歌。

二番　酒

詩人　ベルテッリ ジュリオ アントニオ（大阪大学准教授）



酒

嘉会醉顔歡笑時
玉巵満酌不須辞
誰知狂薬杯中物
忽地使人心苦悲

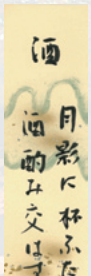
酒

嘉会　醉顔　歡笑の時
玉巵　満酌　辞するを須いず
誰か知らん　狂薬　杯中の物
忽地人をして心苦だ悲しましむる

めでたい宴では酔って赤い顔をした人々の笑い声が響き、玉のさかずきになみなみとつがれた酒を断ったりはしない。誰が知るだろう、人を狂わせる薬であるこのさかずきの中の物が、あっという間に人の心をひどく悲しませてしまうのを。

＊お酒は心の万能薬である一方、猛毒となることもあるという、酒の持つ二面性を思い浮かべてイタリアを故郷とする詩人が詠んだ詩。

歌人　大原千鶴（料理研究家）

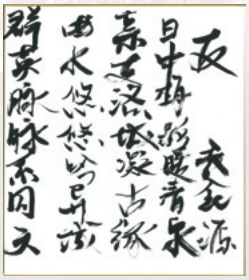


月影に　杯二つ　露台にて　酒酌み交はす　友と我なり

＊歌人が忙しい合間を縫って、本音を話し合うことのできる友人たちと酒を酌み交わす至高の時間を思い詠んだ歌。

四番　友

詩人　戴　鑫源（立命館大学研究生）



友

日中梅影暖清泉
親友洛城凝古縁
曲水悠悠吟異域
群英脈脈繋同天

戴　鑫源

日中の梅影　清泉を暖め
親友　洛城に古縁を凝らす
曲水悠悠として異域に吟じ
群英脈脈として同天に繋ぐ

陽だまりの中、日光が当ってできた梅の影は清らかな泉に映り、私たち親友は古きよき京都で古い時代からの中国との絆を見つめている。はるか遠く異国に流れる曲水において、すぐれた人々は次々と続いて、「山川域を異にすれども、風月天を同じうす」の思いを情感豊かに歌いあげた。

＊中国人留学生である詩人が、中国を起源とする曲水が今京都で行われていることの感慨を詠んだ詩。

歌人　黒須小夏（作新学院高等学校二年生）

我の手に　掌重ねたる友の　心に気づきし　月仰ぐ夜

＊学生生活のさまざまな場面において自身を励ましてくれた友のありがたさ、大切さに月を見つつ改めて気付いた夜の感慨を詠んだ歌

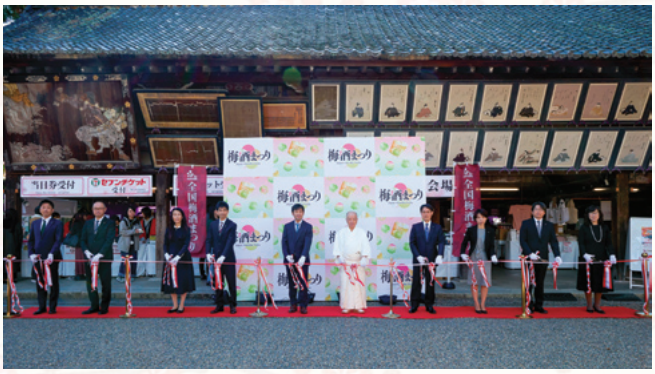
「全国梅酒まつり in 京都 2024」開く
全国の梅酒飲み比べ、愛好家で賑わう

厳選 梅酒まつり Japan Umeshu Festa 2024 in 京都

梅酒研究会代表理事　明星智洋氏

京都市副市長　岡田憲和氏

京都府副知事　武田一寧氏


梅酒まつりオープニングセレモニー

梅、お酒とも御神縁深き当宮で十一月二十一日から四日間、恒例の梅酒まつりが開催され、梅酒愛好家で境内が賑わった。

梅酒の普及活動を行っている一般社団法人梅酒研究会（明星智洋代表理事）主催による「全国梅酒まつりin京都２０２４」で、当宮での開催は通算六回目。今年は「厳選」の冠をつけ、試飲コーナーでは過去に受賞歴のある百銘柄の出品に絞って実施された。

初日の二十一日朝、物販ブースとなった絵馬所前でオープニングセレモニーが行われ、明星会長が「梅酒研究会は、梅酒の価値を高め、〝梅酒を国酒に〟を合言葉に活動している。日本文化である梅酒を楽しんで頂きたい」と挨拶し、宮司も「当宮には平安の昔、病に罹られた天皇が白湯に梅を入れて服され、回復されたという故事による梅の信仰とともに室町時代、当宮神人に麹造りの特権が与えられたことから酒とも御縁がある」と挨拶した。来賓の武田一寧京都府副知事、岡田憲和京都市副市長がそれぞれ挨拶した後、参列者によるテープカットが行われて開幕した。

絵馬所には全国の蔵元から出品された約四百銘柄が並び、お目当ての銘柄を目指して梅酒愛好家が詰めかけた。

また、文道会館ホールの試飲コーナーでは、梅酒品評会で入賞したことのある百銘柄が並び、入場者が日本酒の梅酒やブランデー仕込みの梅酒、柑橘系、マンゴーや桃、リンゴの入った梅酒などなど全国の酒蔵が工夫を凝らした味わい深い梅酒を試飲していた。二十三、二十四の両日は、風月殿で金賞梅酒に食事のついた「極梅酒まつり」も行われ、それぞれ料理に合った梅酒を味わうなど梅酒の魅力を堪能していた。

全国の梅酒好きが集まった

物品ブースでは売り切れになる梅酒も続出した

極梅酒まつりでは梅酒ソムリエによる説明を聞きながら梅酒と料理を楽しんだ

豊太閤の歴史舞台、史跡御土居「もみじ苑」今年も鮮やか
見ごろ長引き閉苑を一週間延長して対応

鮮やかに色づいた史跡御土居と国宝御本殿

〈菅公御歌〉
このたびは
幣もとりあへず手向山
紅葉の錦 神のまにまに

史跡御土居「もみじ苑」を十月二十五日から十二月十五日まで開苑した。今年の秋は暖かく見ごろがやや遅れて長引き、参拝者から「公開を延長してほしい」との声が相次いだため、当初の閉苑予定を一週間延ばして対応した

史跡「御土居もみじ苑」は、天正の昔、太閤秀吉公が川の氾濫や外敵から都を守るために築いた土塁・御土居内に広がるもみじの苑。御土居そのものが京都市内ではほとんど残っていない中、当宮では史跡として保存され、樹齢四百年を越える「三叉の紅葉」を始め約三百五十本のもみじがあり、秋には見事な〝錦秋の美〟が苑内を彩る。

梅をこよなく愛された菅公だが、「このたびは幣もとりあへず手向山 紅葉の錦 神のまにまに」

夜空に浮かび上がる紅葉のコントラストが美しい

ライトアップになると大きく雰囲気を変える

の名歌も遺されており、もみじへの強い思いを寄せられていた。

もみじ苑の開苑中には、「曲水の宴」を始め京都連歌の会による「もみじ連歌会」の張行、上七軒歌舞会による日本舞踊の奉納、露の五郎兵衛一門による「もみじ寄席」、立命館大学邦楽部による奉納演奏、神若会北野天神太鼓会による和太鼓奉納などなど数々の奉納行事を繰り広げ、もみじ観賞に訪れた参拝者を楽しませた。

もみじの見ごろが長引いたことにより、十二月に入っても土・日曜日を中心に賑わいを見せ、最終日の十五日も日曜日とあって終日もみじ観賞者の足が続いた。入苑者入り口にある絵馬所前で行われていた猿回しの曲芸は、垣根が出来るほどの人混みを見せ、見物していた東京から来た女性は「北野天満宮の参拝は初めて。秀吉公の遺構のもみじ苑、歴史を噛みしめながら散策しました」と、感想を述べた。

今年の「もみじ苑」入苑者の最大の特徴は、インバウンド（訪日外国人）が多かったことである。コロナウイルスが落ち着いてからは、訪日する人々は日々増加傾向にあったが、特に紅葉の時期には、京都の様々な場所で訪日観光客の姿が見られ、場所によっては人が溢れかえる場所もあった。当宮においては、順路を定める等混雑が緩和される様に取り組んだ。その結果、入苑者が多い土日でもゆったりと紅葉狩りを楽しめ、入苑した訪日観光者からは「市街地にありながら混み具合もひどくなく、日本ならではの自然がゆっくり堪能できた」という声も寄せられた。

美しく彩られた鶯橋

展望台は紅葉を楽しむ声であふれた

文道会館を爆笑で包む
露の五郎兵衛一門の「もみじ寄席」

落語の露の五郎兵衛一門による恒例の「もみじ寄席」が十一月十七日、文道会館ホールで行われ、満席の会場を笑いの渦で包んだ。

上方落語の祖といわれる初代露の五郎兵衛が江戸時代前期、当宮境内で落語を行ったという御神縁から、一門が「もみじ寄席」の名で、毎年この季節に行っており、大勢のファンが詰め寄せた。

新幸・陽照・棗・紫・団四郎・瑞・眞・都・吉次の新旧の落語家九人が、古典や新作で一席伺い、会場内は始めから終わりまで爆笑の連続だった。

●初代五郎兵衛碑の前での碑前祭に参列

「もみじ寄席」の開演に先立ち、出演の落語家らは御本殿に昇殿参拝した後、一の鳥居を入ってすぐ東側にある初代五郎兵衛碑前で斎行された碑前祭に臨み、一門の益々の隆盛を祈願した。

ライトアップ初日、もみじ苑の舞台
上七軒の舞妓さん
あでやかに日本舞踊奉納

ライトアップ初日の十一月九日夕、史跡御土居内の特設舞台で、上七軒の舞妓さんによる日本舞踊の奉納が行われた。

ライトアップの始まりを告げる恒例の奉納で、舞妓三人が、淡いライトの光の中で『もみじの橋』「重ね扇」「京の四季」の三曲をあでやかに舞い上げ、参拝者の拍手を浴びていた。

今年のもみじは遅く、全体的には色づく程度だったが、毎年この日を楽しみにしている参拝者もあり、舞妓の舞踊を見た後、御土居内のあちこちで散策する姿が見られた。

京都連歌の会
恒例の「もみじ連歌会」を張行
詠まれた四十四句を奉納

京都連歌の会は、恒例の「もみじ連歌会」を十一月十七日、紅梅殿において張行し、「賦何路連歌」で詠まれた四十四句を奉納した。

連歌とは五・七・五の発句と七・七の脇句の長短句を交互に複数人で連ねて詠んで一つの歌にしていくというものであり、「文道大祖」「風月本主」と崇められた菅公は、連歌の神としても篤く信仰されており、とくに室町期には当宮境内に連歌会所も設けられ、宗砌・宗祇・兼載といった名高い連歌師が名を連ね、法楽連歌興行の一大拠点ともなっていた。

京都連歌の会は、こうした伝統を引き継ぎ紅梅殿において秋には「もみじ連歌会」、春には「梅ヶ枝連歌会」の張行を恒例としている。

この日、詠まれた連歌は、次々、外に張り出され、紅葉狩りの参拝者らが足を止めて見入り、また紅梅殿上で催されている連歌会の様子を興味深そうに見つめていた。

神のまにまに

京都連歌の会　光田 和伸

紅梅殿に次々に張り出される短冊を遠くからご覧になって多くの参詣者の方が近づいて見上げてくださいます。皆さん一様に「ほんとうに今ここで作っているのですか」「どうしてとっさにできるのですか。作っています。一句に十分ほどかかりますが古人は三分ほどで作ったようです。やみくもに荒野をゆく心境ではなく、ゆく道は次第にくっきりと見えてくる、だから迷わず詠めるのです。念じていることは、つねに菅公天神さまの生涯とご遺徳を思い浮かべること。そこに次の一句が浮かぶと言えばいいでしょうか。脇「**神からの霜**」は霜のもみぢは神授の物と思い、第三「**立ちならぶ峰に朝の雲消えて／流れ来たるは去ける川つら**」は、西下される天神様の目に映じたものはかくもあっただろうかとほのかに感じて受け取っているのです。六「**ふるさととほく菊のいろいろ／をさまれるものから渡る月のかげ**」は雲居の庭の菊を偲びます。八「**千尋も澄めや秋の夜の底**」は「海ならずたたへる水の底までにきよき心は月ぞてらさん」、配所にあって無実を訴える神詠（新古今和歌集巻一八）に寄り添う。裏一「**祝ぎうたをここに伝へて幾代へし**」は北野の地に菅公を讃えてきた月日を思い起こし、一同の心をひとつにする呼びかけです。このあたりまでを面十句と言い、故事を詠まない約束です。しかし連衆の心を一つの方向へ向けないでは連歌は詠めるものではありません。裏九「**宮の瓦**」に「都府楼の瓦の色」の詩の一節を、裏一〇「**幣敢へぬまで**」に「手向山」の歌を思います。裏一一「**東路の奥**」は『更級日記』の冒頭「東路の道の果てよりもなほ奥つ方に生ひ出でたる人」、作者菅原孝標女の回想です。父の孝標は菅公四代の苗裔（玄孫）。十三歳の九月に上総国府を発ち、一二月に入洛。翌春にはきっと洛中の聖跡を巡って菅公を偲んだであろうと。その庭には今も君を待つようにゆかりの梅花が咲き匂っています（話題のドラマ「光る君へ」と重ねて別の妙味あり）。名残折表七「**刈萱の露かは風にこぼるるは**」は「刈萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり」（神詠新古今巻一八）、大宰府政庁近くの「刈萱の関」を通ったおりの菅公の嘆きを受けてはらはらとこぼれたのは私の目からの涙なのだと示し、八「**国はおとどに行方わからぬ**」は左大臣藤原時平なのでしょう。道真公を讒言し追放して以後、政道は長い混乱期に入った。一句単独では、現在の日本でまた海彼のかの国で新しい指導者が誕生したことへの一抹の不安を仄めかしてもいます。そちらへの展開を誘ったのか、結果は仁徳天皇の故事を介して、能登の震災を思いやるものになりました。

今回のもみぢ連歌には太宰府天満宮の神縁連歌会から有川宜博宗匠と俊英の三橋彰弘氏の参集を得ました。名残花「**自づから匂へよ花よ在りとこそ**」は梅花の馥郁に溢れる菅公の現前を讃えています。太宰府天満宮もまた永遠であることを祈念する執筆の挙句です。

北野天満宮　聖廟法楽

令和六年一一月一七日
於　北野天満宮　紅梅殿
宗匠　光田　和伸
執筆　服部　満千子

賦何路連歌

初折表

もみぢ散る清き御空に映ゆる紅　重十九
見れども飽かぬ神からの霜　和伸
立ちならぶ峰に朝の雲消えて　宜博
流れ来たるは去ける川つら　彰弘
鷺の声何のありてかまたすなる　貞子
ふるさととほく菊のいろいろ　かおり
をさまれるものから渡る月のかげ　博介
千尋も澄めや秋の夜の底　敦子

初折裏

祝ぎうたをここに伝へて幾代へし　稔
変はらぬ山も動く日やある　亮子
御籠の教の明け暮れ石の上　まり絵
いづこも弥陀の大き悲しみ　和行
空蝉にもろ声もなき園深し　奈智子
木の下隠りゆきしわが恋　満千子
今はとて空しき枝に文ひとつ　和伸
またけき月も訪ふ氷面鏡　貞子
星冴ゆる宮の瓦ぞなつかしく　かおり
しろたへの幣敢へぬまで風　博介
東路の奥にや春はめぐむらん　敦子
雪消にしのぶ聖き御跡ぞ　稔
ゆかし庭まばゆき君を花も待つ　亮子
雲も来て添へ糸竹のうへ　まり絵

名残表

いにしへの受け継ぎきたる燈輝く　楠彦
ひとりの峰を越ゆるゆふぐれ　佐代子
離れてなほかの袖の香ぞ忘れかね　正純
新たなる出会ひさもあらばこそ　良太
幾そ度鹿の鳴く聲細き道　晄丈
月光降る宿のものの恋しき　佐代子
刈萱の露かは風にこぼるるは　まり絵
国はおとどに行方分からぬ　和行
のどかなる民の煙を眺めたし　亮子
能登に田返す日ぞ待たれつつ　かおり
八重桜しだるる枝に命あり　敦子
あれは何ぞと親が手を引く　彰弘
異鳥に卵預くるほととぎす　宜博
憂き世なれとは願はぬものを　敦子

名残裏

海鳴りの音いづれより響くらむ　正純
幾浦かけてけふも旅路か　稔
白砂にまことや扇逆しまに　貞子
芳しき風雲と流るる　亮子
玉垂れは甲干す亀の背に落ちて　良太
若草芽吹く雪のさやけさ　晄丈
自づから匂へよ花よ在りとこそ　彰弘
西なる梅も常盤なる斎庭　満千子

句上

稔重十九　一　光田和伸二　押川かおり三　有川宜博二　大村敦子四　固子まり絵三　片山博介二　坂上奈智子一　新田佐代子二　中村和行二　中澤良太二　西田正純二　三橋彰弘三　関本稔三　服部満千子二　中晄丈二　河合貞子三　森亮子四　東川楠彦一

「宗教者・信仰者の祈りと行動で世界平和を」

第43回世界連邦平和促進全国宗教者・信仰者京都大会開く

「戦争と平和」～なぜ人類は戦争を止めないのか～をテーマに
御本殿で平和祈願祭斎行し、風月殿で大会宣言採択

御本殿にて世界平和祈願祭を斎行

世界連邦日本宗教委員会（会長・田中恆清石清水八幡宮宮司）主催による「第43回世界連邦平和促進全国宗教者・信仰者京都大会」が十一月二十日、当宮に約百三十人が参加して開かれ、「宗教者・信仰者の祈りと行動で世界平和を」を要旨とする宣言文を採択した。

世界連邦日本宗教委員会は、昭和四十二年、神道、仏教、キリスト教、教派神道、新宗教の代表という超宗教の平和運動組織として発足した。以来、主要都市の教団で平和促進全国宗教者大会を開き、〝世界平和の祈り〟を行うとともに世界の諸教団に宗教平和使節団を派遣して全人類の共生を訴えるなどの行動も行ってきた。

この日の当宮での京都大会は「戦争と平和」～なぜ人類は戦争を止めないのか～をテーマとするもので、午前中、参加者が御本殿に昇殿して斎行された世界平和祈願祭で幕開けした。斎主が祝詞を奏上し世界平和を祈願した後、巫女が神楽・紅わらべを奉奏した。斎主に次いで京都大会の大会長でもある当宮橘重十九宮司、神道代表として賀茂別雷神社名誉宮司の田中安比呂氏、仏教代表として比叡山延暦寺副執行の小森文道氏、教派神道代表の大本教主の出口紅氏、新宗教代表の立正佼成会総務部次長佐原透修氏、さらに参列者代表として京都大会の実行委員長を務められた田中恆清石清水八幡宮宮司が次々と玉串拝礼され、まさに超宗教による祈りの場となった。

元国連事務総長特別代表の山本忠通氏による講演会

世界連邦日本宗教委員会会長石清水八幡宮田中恆清宮司

午後からは風月殿に会場を移して大会が始まり、冒頭「私たちは、いま心を一つにして祈ります」との導師の言葉に引き続き、全員で「…神仏の限りない御恵みのもと、真の世界平和実現のためお役に立たせて下さい」とする祈りの言葉を唱和した。

大会長の当宮宮司や大会実行委員長の田中石清水八幡宮宮司ら主催者側の挨拶などの後、元国連事務総長特別代表の山本忠通氏が「国際社会の置かれている厳しい現状と課題」と題して講演した。山本氏は豊富な経験をもとに厳しい国際情勢などを話し、参加者は真剣な表情で耳を傾けていた。最後に約九百字からなる大会宣言文を拍手で採択して京都大会を終えた。

垣根を越えて日本の文化・伝統を次世代へ

親友会グループと島津製作所、当宮の第二回勉強会

藤井譲治京大名誉教授の講演「北野大茶湯と秀吉」を聴く

御本殿にて正式参拝

より良い医療を創造し社会貢献を目指す親友会グループと、科学技術で〝人と地球の健康〟を目指す株式会社島津製作所、当宮による勉強会が、十一月二十六日、風月殿で開催された。分野の垣根を越えて、日本の文化と伝統を次世代へ繋いで行こうとの取り組みで、今年三月に次いで二回目となる。

この日は、親友会グループの田邉親男会長、島津製作所の上田輝久代表取締役会長を始め両社の社員二十人が参加、国宝御本殿に昇殿参拝した後、風月殿に場所を移しての勉強会となった。

この日の講師は、半世紀にわたって当宮の古文書調査に当たられている藤井譲治京都大学名誉教授で、講題は「北野大茶湯と秀吉」。司会の神職が「本日は、奇しくも大茶湯にも繋がる十二月一日の献茶祭に先駆け、使用するお茶を御神前に献上する御茶壺奉献奉告祭の祭礼日です」と紹介した。

「北野大茶湯」は、天正十五年（一五八七）十月一日、当宮境内で開催された歴史に名高い大茶会だが、参加者にこの茶会についての理解を得るため、冒頭、茶道研究者の書いた大茶湯に関する一文が紹介された。そして、京都・吉田神社祠官で公家の吉田兼見の日記『兼見卿記』や奈良・興福寺の塔頭寺院の僧が書いた日記『多門院日記』など当時の一級史料を示しながら、前述の一文がどこから引かれたものなのか明らかにするとともに、開催場所や規模、秀吉の行動、参加者の顔ぶれなどなど細かく解説した。そして、当時の政治状況を鑑みながら「北野大茶湯は、秀吉による政治的な背景もあったが、集めた道具類はかなりのものが今も伝えられ、茶に親しむ多くの人を招いたことで、江戸時代を通じて大きな話題になった」とし「文化面でいえば、その後の茶湯の広がりを含めて大きな意味合いを持つ大茶会だった」と、結論づけた。

藤井譲治氏の講演に聞き入る参加者

用意された資料を基に多くの質疑応答が行われた

勉強会に先駆け抹茶が振舞われた

この後、藤井名誉教授に向けて「秀吉と北野天満宮の出会いの切掛けは？」「大茶湯についての大名側の史料はあるのか？」などなど多くの質問が寄せられた。

会場には、江戸後期の画家浮田一蕙の描いた『北野大茶湯図』が掲げられ、また、昭和十一年（一九三六）に当宮で開かれた「昭和北野大茶湯」の際に出版された刊行物が並べられ、参加者は熱心に見入っていた。

令和再興「雪月花の三庭苑」

梅苑「花の庭」公開

ゆったりと見て回れるよう回遊式となっている

展望所からは苑内が一望できる

当宮では、来る令和九年（二〇二七）の式年大祭「菅公御神忌千百二十五年半萬燈祭」の斎行に向け、これまで当宮に纏わる様々な歴史や伝統を繙く調査研究を行い、旧儀復興とともに境内整備を含む記念事業を進めている。こうした一連の事業の中で、令和四年に再興したのが、梅苑「花の庭」である。

「雪月花の三庭苑」で有名なこの庭は、江戸時代、寺町二条の妙満寺（現在は左京区岩倉）の「雪の庭」、清水寺の「月の庭」、そして当宮の「花の庭」、それぞれが成就院（成就坊）という塔頭に造られた庭であり、かつて「京都の名勝」としてその名を馳せたと伝えられている。

また当宮「花の庭」は、江戸時代の連歌師・松永貞徳が作庭した庭として伝わり、松永貞徳翁を顕彰し、和歌・連歌の神として崇敬される御祭神菅公の御神徳発揚の一助とするべく梅苑「花の庭」として新たに蘇らせた。

作庭の松永貞徳翁は、日本の古典に精通し、歌人としてその道を極め、連歌を学んだのち、俳諧という新しい分野を開拓した人物であり、多くの文化的遺産を遺し、その代表作の一つが「雪月花の三庭苑」であった。

雪月花は、中国の「白居易」の漢詩「寄殷協律」の一節に詠われた「雪月花時最憶君」から取られた言葉であり、日本では萬葉集のなかで、大伴家持が雪月花の和歌を詠むなど、日本の美意識の基準となってきた。「白居易」は日本文学にも大きな影響を与えたといわれ、平安時代、稀代の文化人であり我国における漢詩や和歌・連歌の大祖と讃えられた御祭神菅公も、白居易に影響を受けた一人であった。江戸時代、先人に学んだ松永貞徳は、和歌連歌の神として菅公を敬仰し、「雪月花　一度に見する　卯木かな」など、様々な俳諧や和歌を遺し、自身が作庭した三庭苑には、この「雪月花」の名を冠した。

ライトアップ時には日中とは異なる雰囲気に包まれる

見ごろには境内中に梅の香りが漂う

北野天満宮×長浜観光協会

第四回「北野盆梅展」開催

梅苑「花の庭」の公開にあわせ、近年恒例となっている滋賀県（公社）長浜観光協会（会長前川和彦）出展協力・（公社）京都市観光協会（会長田中誠二）の後援で、第四回「北野盆梅展」を一月二十五日から二月十六日まで文道会館にて開催する。

長浜観光協会で毎年開催されている長浜盆梅展は、昭和二十七年（一九五二）に始まり、今年で七十四回を数える歴史・規模ともに日本一といわれる盆梅展。

梅苑「花の庭」再興に併せて初めて開催された「北野盆梅展」は、長浜観光協会との長年の御縁により、当宮の梅苑開苑時期にあわせて開催することで、京都市と長浜市両市の観光をさらに発展させ、北野の梅の信仰をより広く発信していきたいとの双方の強い想いのもとに実現させたもの。

今回はＪＲ京都駅ビルに特別ブースを設け、北野天満宮と長浜盆梅展に関する様々な展示物を公開する予定となっている。また、当日は午後から受験に向かう学生を応援するべく、北野天神太鼓会による応援太鼓の演奏も行われる。

●北野盆梅展

開催期間　令和七年一月二十五日（土）～二月十六日（日）
時間　午前九時～午後四時（午後三時四十分受付終了）
入場料　無料（但し、梅苑入苑料が別途必要）

●北野天満宮 梅苑「花の庭」公開

開苑期間　令和七年一月二十五日（土）～三月十六日（日）
時間　午前九時～午後四時（午後三時四十分受付終了）
ライトアップ　令和七年二月十四日（金）～三月二日（日）
時間　午前九時～午後八時
（午後七時四十分受付終了、日没よりライトアップ開始）
※閉苑日は梅の開花状況で判断いたします

新春の祭典・行事

元旦より 初詣

当宮の初詣は、例年受験合格祈願を始め家内安全や厄除開運などの御祈祷を受けられる多くの方で御本殿は混雑し、昇殿参拝者は、仮設テント等でお待ちいただいていたが、一昨年社務所を改装し「風月殿」とし、昨年より殿内広間を祈祷控室とさせていただき、暖房の効いた部屋でお待ちいただけるようになった。

また、境内にも御神前に熱心に手を合わせる人々はもちろんのこと、お札やお守りなどを求める参詣者で境内は溢れかえる。特に、新年の御札（おふだ）や御守り、招福の天神矢や干支の一刀彫り、梅ノ枝「思いのまま」など、お正月の縁起物を求められる参詣者にが多く訪れ、終日賑わう。

一月一日 歳旦祭

新年が明けて最初の神事である歳旦祭が、午前七時から御本殿において斎行される。

祭典では、年頭に当たり皇室及び国家の安泰隆昌と世界の平和、氏子崇敬者を始めとする国民の弥栄を祈願する。

一月二日 筆始祭並びに「天満書（てんまがき）」奉納

午前九時から、御本殿大前に菅公御遺愛の硯などの御神宝を供し、書道の神でもある菅公の御神徳を偲び、この日から神前書き初め「天満書」を始めることを御神前に奉告する。

「天満書」は、絵馬所で四日まで行われ、子どもたちが書道の上達を願って力強く書き初めをし、作品を奉納する。これに家庭で書いて奉納された作品を加え、例年約四千点が、十九日午後一時から二十六日午後三時まで西廻廊で展示され、展示初日に書家の先生らによって審査が行われ、優秀者は表彰される。

一月二日まで　献華展

華道家元池坊京都支部による新春を彩るいけばなの奉納。

毎年、元旦と二日に神楽殿で披露され、立花・生花・自由花の形でいけられた正月らしい生花が、初詣参詣者の目を楽しませている。

一月三日　新春奉納狂言

新春奉納狂言が午後一時から神楽殿で、猿楽会と茂山忠三郎社中によって行われる。

一月五日　そろばんはじき初め

「北野天満宮そろばんはじき初め奉賛会」に集う小中学生約四百人が、御本殿参拝の後、午前十時から絵馬所にて、そろばんの上達を願って「はじき初め」を奉納する。

長さ五・五メートル、四百桁もあるジャンボそろばんが毎年話題となる。

一月七日　若菜祭

五節句の一つ、正月七日「人日の節句」に、春の七草の若菜で粥を炊き、御神前に供える若菜祭を斎行する。

祭典では、新年の節句を祝うとともに、氏子崇敬者を始め、国民の無病息災を祈る。

一月二十五日　初天神

一月二十五日は、一年で最初の縁日であり、特に「初天神」と呼ばれ、京阪神はもとより全国津々浦々から参詣者が訪れ親しまれている。

表参道を始め境内周辺は、骨董や古物商・飲食品の屋台など多くの露店が立ち並び、一際賑わう。

この頃は、すでに受験シーズンに入っており、御本殿や牛社の前は、受験合格・学業成就を祈る若者が行列をなす光景が見られる。

二月二日　節分祭と追儺式

午前十時から御本殿で節分祭を斎行し、神職が今年一年間の除災招福を祈った後、午後一時から神楽殿で、茂山千五郎社中による伝統の「北野追儺狂言」が奉納され、併せて上七軒歌舞会の芸舞妓による日本舞踊の奉納が行われる。そして最後に、狂言師と芸舞妓によって、神楽殿から威勢よく福豆が撒かれる。

当宮は、京の都における「乾（北西）の隅」の守り神として創建されて以来、災難除・厄除の社としても篤い信仰があり、節分には「四方詣り」と称して、当宮を始めとする四社寺を参拝し、無病息災を祈る習慣が根付いており、多くの参拝者で終日賑わう。

二月二十五日 梅花祭

九百有余年の歴史を誇る祭典

菅公の祥月命日となる二月二十五日午前十時から、御本殿にて梅花祭を厳粛に斎行し、御祭神の御遺徳を偲び、御神慮を景仰（けいぎょう）申し上げる。

御神前には、梅の花を用いた「梅花の御供」「紙立」という、七保会会員が調製した二種の特殊神饌が奉饌される。

また、貞明皇后御参拝の古例により宮内庁京都事務所長が、皇后陛下の御代理として拝礼される慣わしとなっている。

境内では、美しく咲いた梅花の下、上七軒の女将や芸舞妓らの奉仕により「梅花祭野点大茶湯」が催され、公開中の梅苑の馥郁（ふくいく）たる花の香を愛でる人々や、縁日を楽しむ見物客も相交わり、境内は非常に多くの参拝者で賑わう。

三月二十三日 梅風祭

当宮崇敬者団体、梅風講社の祭典である梅風祭を、午後三時半から御本殿で斎行する。

祭典では、梅風講社の更なる隆盛と講員一同の無病息災を祈願し、御垂髪（おすべらかし）に巫女装束を身にまとった「八乙女」が、舞を優雅に奉納する。

北野の光

斎行された祭典・行事《十月～十二月》

一條天皇行幸始祭、厳かに斎行

一條天皇が当宮に初めて行幸されたことを寿ぐ祭典・一條天皇行幸始祭（中祭）を十月二十一日午前十時から御本殿で厳かに斎行、宮司が恭しく祝詞を奏上し、皇室の弥栄・国家の安泰を祈願した。

寛弘元年（一〇〇四）のこの日、一條天皇は初めて当宮へ行幸され、以降歴代天皇の当宮への行幸は二十数度に及んでいる。当宮への初行幸については藤原道長の日記『御堂関白記』にも記載されるほどで、当宮にとっては極めて重要なものであった。

長年にわたり行幸始祭が斎行されてきたが、戦後の混乱期に一時途絶えてしまい、初行幸から一〇一〇年に当たる平成二十五年、六十数年ぶりに再興された。

境内華やぐ七五三詣

十月から十一月の終わりにかけて七五三詣の親子連れの参拝者が増え、境内は華やいだ雰囲気となった。

七五三詣の最盛期は例年通り十月終わりごろから。土曜・日曜・祝日を中心に、親に手を引かれた子どもたちで大賑わいとなった。羽織・袴の男の子や振袖姿の女の子の姿もあり、「動かないで」「笑って」と、スマートフォンをかざす親たちの声に恥ずかしそうにポーズをとる光景があちこちで見られた。

御本殿で小さな手を合わせて祈った子どもたちは、授与品の千歳飴や知恵のお守り、祝笹などを手にしてうれしさ一杯。スキップをして飛び跳ねる子や付き添いの手を振りほどいて反対方向へ行く子、座り込む子もいるなど周囲に笑いを振りまき、「かわいい」の参拝者の声が境内各所で上がっていた。

新嘗祭を斎行、五穀豊穣に感謝

今年収穫した新穀などを御神前に供えて五穀豊穣に感謝する新嘗祭を十一月二十三日午前十時から御本殿に神社役員・氏子崇敬者ら多数参列の下、厳かに斎行した。

新嘗祭は、天皇が天神地祇に新穀を供えて御自らも食し、五穀豊穣に感謝される重要な祭儀で、全国の神社でも、この日、斎行されている。

御神前には、今年収穫した稲穂や米、醸造されたばかりの白酒を始め海や山の幸が供えられ、宮司が祝詞を奏上、巫女が「豊栄舞」を奉奏し、今年の五穀豊穣に感謝、皇室の弥栄と国家の隆盛、氏子崇敬者の家内安全を祈った。

当宮独特の特殊神饌を供え 赤柏祭を斎行、神恩に感謝

赤くなった柏の葉で御飯を包んだ当宮独特の特殊神饌を御神前に供え、日々の神恩に感謝し、国民の無病息災を祈願する赤柏祭を十一月三十日午前十時から御本殿で斎行した。

柏の葉は、古代から神前への供物の下に敷くために使われるなど祭事用として神聖に扱われてきた。大嘗祭の神饌を盛り付ける容器も、竹と柏の葉で作られている。

当宮では六月十日に青い柏の葉に御飯を包んでお供えして斎行する青柏祭と、この日の赤柏祭を季節の変わり目の神事として古くから斎行している。『国語大辞典』（小学館発行）にも、青柏祭の紹介として「京都北野神社の祭り」として取り上げられており、かなり珍しい祭典といえる。

柏の葉は、境内に自生する柏の木から採取して使うが、安永七年（一七七八）の記録には、お供え用として採ったことが書かれ、柏の木の奉納や植樹の記録もある。

この日の祭典では、これも古くからの習わしによって胡桃（くるみ）の特殊神饌もいっしょに供えられた。

「去年の今夜清涼に侍す・・・捧持して毎日余香を拝す」

名詩『重陽後一日』の菅公偲び余香祭斎行
献詠歌披講式も古式ゆかしく

「去年の今夜清涼に侍す　秋思の詩篇
独り腸（はらわた）を断つ　恩賜の御衣今茲（ここ）に在り
捧持（ほうじ）して毎日余香を拝す」（重陽後一日）

配流先の大宰府で名詩『重陽後一日』を詠まれた菅公を偲ぶ余香祭を十月二十九日午後二時から御本殿で斎行、その後、献詠歌披講式を執り行った。

右大臣の位にあった菅公は昌泰三年（九〇〇）九月、清涼殿での重陽の宴に召され、見事な詩を詠まれ、醍醐天皇から褒美の御衣を賜った。しかし、その翌年、左大臣藤原時平の讒言によって大宰府に配流された。一年前の栄華を追想され、詠まれたのが『重陽後一日』だった。菅公の切々たる思いが溢れており、余香祭は、菅公を偲んで斎行する毎年の祭事。斎主が祝詞奏上して祭典を斎行した。この後、この日の恒例行事となっている献詠歌披講式が行われた。全国から寄せられた献詠（今年の兼題は「夕霧」）の中から歌人で公益財団法人夕斐斎弘道館館長の濱崎加奈子氏が選んだ八首を車座になった向陽会（冷泉為弘会長）会員の六人が、綾小路流と呼ばれる独特の節回しで古式ゆかしく披講した。

この後、宮司に引き続き冷泉会長、参列者の代表が玉串を捧げた。

御神前には白と黄の菊の花が供えられ、神職・向陽会会員らは烏帽子に菊花を挿して奉仕した。

令和六年余香祭献詠披講選歌『夕霧』

夕されば　たづぬる家の　おぼつかな
　霧の籬に　ゆらぐおもかげ　　服部　満千子

祖と我を　つなぐ糸あり　かけまくも
　祈る社に　夕霧のとき　　若狭　静一

秋冷と　いへども実りの　山に立つ
　夕霧朱に　ひかり宿せり　　朝比奈　栄子

秋来ぬと　野辺にうづらの　鳴きをれば
　夕霧深し　深草の里　　田口　稔恵

秋の田の　かりほをおほふ　夕霧に
　行く道かくる　寒菊の頃　　塩小路　光胤

夕月夜　櫂さす音も　遠くなり
　霧たちこめる　川の面かな　　選者　濱崎　加奈子

空高く　しじまに染むる　雁の声
　夕霧晴れて　光澄む古都　　北野天満宮権宮司　神原　孝至

暮れまだき　暑き京を　出で来れば
　清滝に立つ　夕霧涼し　　北野天満宮宮司　橘　重十九

いろもみぢ　菊香清しき　もりの庭
　浮きつ沈みつ　霧らふ夕暮れ　　向陽会会長　冷泉　為弘

ふかむ秋　錦に染むる　手向け山
　夕霧立ちて　滲むもみぢば　　神田神社宮司　平野　修保

誰がための　錦とならむ　紙屋川
　千鳥さえづり　つつむ夕霧　賀茂御祖神社権禰宜　田中　明仁

八束穂や　稲木にぎはふ　御戸代の
　みのり愛しと　つつむ夕霧　　向陽会　杉田　潤

紙屋川　もみちは映ゆる　夕つくよ
　みなもほのめき　立ちし薄霧　　向陽会　中森　祐士

秋の田の　稲刈りおへて　空みれば
　夕霧のはれま　よいの明星　　向陽会　安井　正明

令和七年　献詠兼題

▼一月　夢　▼二月　亀　▼三月　谷風
▼四月　外山　▼五月　燕　▼六月　滝
▼七月　宵　▼八月　住吉　▼九月　鳥
▼御旅所　松虫　▼十月　にほひ　▼余香祭　紙
▼十一月　嵐山　▼十二月　祈

天神さんの迎春準備

事始め 大福梅の授与始まる

元旦の祝膳の縁起物として多くの人々に親しまれている大福梅の授与が事始めとなる十二月十三日から始まり、いよいよ正月の到来を感じる時期となった。

大福梅は、元旦に白湯や初茶の中に入れて頂くことで邪気を祓い、一年間の無病息災を祈る当宮ならではの縁起物である。疫病が流行した平安時代天暦五年（九五一）には、村上天皇も病を羅られたが、当宮から採れた梅を干したものを茶に入れて服したところ、平癒したとの故事が大福梅の由縁である。

当宮境内にある約千五百本の梅の木から採れた梅の実を塩漬けにし、梅雨明けと同時に天日干しにして調製し、令和六年十一月十三日に当宮巫女が裏白を添えて奉書紙に包んだものを授与している。「毎年、元旦に大福梅を入れた茶を飲み、天神さまの御神徳を頂くのが長年の習慣」であるという人も多く、初日から大勢の参拝者が授与所で大福梅を受けていた。

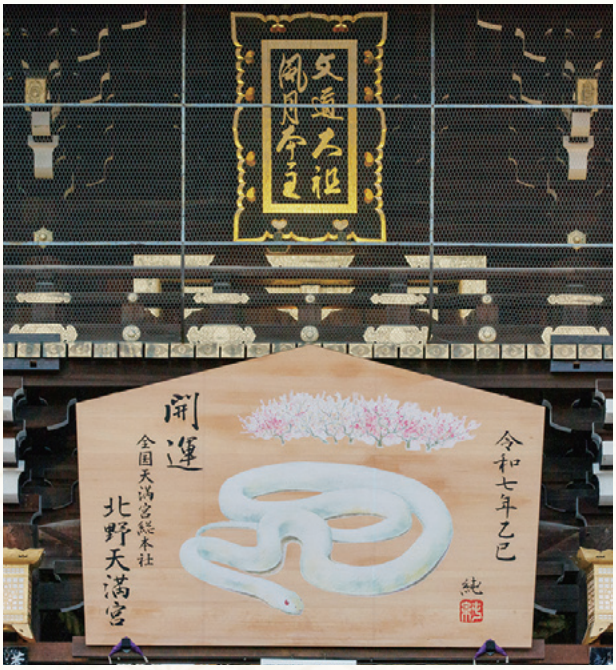
また、事始めに先立つ十二月一日には、楼門に奉掲された大絵馬と同じものを小型化した干支絵馬や、来年の干支である「巳」をかたどった縁起物の授与も始まった。

来年の干支「巳（み）」の大絵馬奉掲 白蛇に託す力強い生き方

来年の干支「巳」＝蛇＝を描いた大絵馬が十二月五日夕、楼門に掲げられ、一足早く新春の香を振りまいた。

白蛇を描いた干支絵馬は、無垢のヒノキ材を使い、幅三・三メートル、高さ二・二五メートル、重さ百二十キロという大きなもの。足場の上の宮大工や神職ら十人がかりで取り付けると、見上げる参拝者や修学旅行生から拍手がわいた。

原画を描いた画家の三輪純子さんは、父の日本画家晃久氏から引き継いで今年で四年目。「へびは『日本書紀』にも出てくる神さまの化身として神聖な生き物。脱皮をするので再生や復活、生命力の象徴でもある。新しい年に力強く生きてほしいとの願いを込めて描きました」と、自作の絵馬を見上げながら話された。



正月巫女奉仕者の研修会開く 外国人参拝者への応接も学ぶ

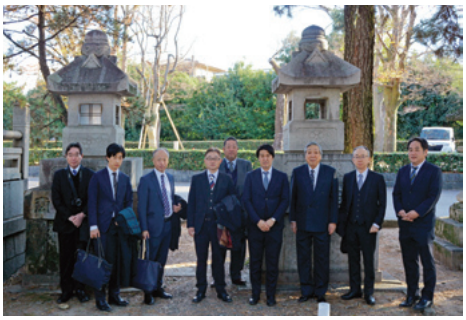
初詣参拝者の応接に当たる正月巫女奉仕者の研修会が十一月三十日、午前と午後の二回わたって行われ、合わせて約百二十人が応接の仕方などをみっちり学んだ。インバウンド（訪日客）の増加に伴い、初めて海外からの参拝者に対応する仕方などの研修も受けた。

毎年この時期に行う恒例行事で、白衣・緋袴に着替えた学生たちは、緊張の面持ちでまず御本殿に昇殿参拝し、初詣の応接が無事に務まるよう祈った。この後、文道会館に場所を移して研修に臨み、神職から御守りやお札などの授与品の種類、言葉遣いや参拝者に接する応接の仕方などについてみっちり学んだ。

外国人参拝者への対応は今年初めてで、当宮のインフォメーションガイドの男性が、お守りの意味や御利益の英語説明などについて話し、学生たちは、忘れてはならないとメモを取っていた。

北野と紙の信仰

かつて御所の紙漉き場であった紙屋川紙・文芸の信仰深き北野天満宮



京都紙商・北野天満宮灯籠保存会（会長山田芳弘氏）が十二月八日、当宮に正式参拝のため来宮した。

当宮の境内西側・史跡御土居内を流れる紙屋川は、平安時代官用の製紙所である紙屋院が置かれ、紙屋院で奉製された和紙は、御所で使用する紙として献上されていた。

また当宮御祭神菅公は、学問のみならず連歌や和歌を始めとする文芸の信仰や北野文庫に代表される書肆の信仰が篤く、紙にかかわる信仰が多くあることから、古来紙関係者からの崇敬が篤く、明治三十五年の菅公御神忌一千年大萬燈祭に際しては、和紙発祥の地を顕彰するべく、「京都紙商」の名で表参道に燈籠を奉納（その後昭和二十六年に現在の石燈籠二基を奉納）され、今日に至るまで崇敬されている

正式参拝に先立ち先祖が奉納された石灯籠の前で記念撮影を行い、その後御本殿にて正式参拝された。参拝後は、電子化の進む世情の中、紙の持つ魅力をより知ってもらおうと、令和七年に催しを行うべく様々な意見が取り交わされた。

年賀はがき、京都府版のデザインは当宮御本殿と飛梅

発行を記念し日本郵便がはがき贈呈式

来年のお年玉年賀はがきの京都府版として日本郵便株式会社は、当宮御本殿と飛梅を図柄としたものを採用、十一月六日、発行を記念し、はがき贈呈式を行った。

式典は、当宮から宮司、日本郵便から小池信也近畿支社長、京都中央郵便局や西陣郵便局の局長ら六人が出席して行われた。冒頭、司会者から当宮と飛梅について簡単な説明が行われた後、小池支社長が「寄付金付き年賀はがきの京都府版として、国宝の御本殿と代々受け継がれている飛梅を京都在住のイラストレーターながたみどりさんに華やかに描いて頂いた。この年賀はがきを通じて北野天満宮さまの益々の発展に少しでも役に立つなら幸いです」と挨拶され、小池支社長から宮司へ年賀はがきなどを入れた額が贈呈された。

次いで宮司が贈呈式開催への謝意を述べた後「日本の郵便制度は明治の初めに始まりました。日本は明治に入り、和魂洋才の言葉のもと西洋の進んだ学問や文化などを積極的に取り入れ、日本の近代化が進みました。その根底には、日本の精神を守りながら外国の進んだものを取り入れることを是とされた御祭神菅原道真公の和魂漢才の精神があります。ネット社会ですが、郵政百五十余年の歴史の重みと郵便の大切さを今一度考えねばならない時だと思っています」と、挨拶した。

式典は、年賀はがきの意匠となった御本殿と飛梅が望める中庭で行われ、関係者の記念撮影も行われ、日本郵便のマスコットキャラクターである「ぽすくま」も登場し、盛り上げた。

京都府版の年賀はがきは、四十四万枚印刷され、京都府内の郵便局などで販売されている。

インバウンドで海外から大勢が来宮

ヒラリー・クリントン氏御一行も来社

新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、再び多くの訪日観光者が増えている。当宮も例にもれず、もみじの観覧シーズンという事もあり、大勢の外国人観光者が連日参拝に訪れている。

六年十一月二十一日には、日本の文化に触れる為に来日していた米国の元国務長官ヒラリー・クリントン氏御一行が当宮に来宮し、御本殿で参拝された後、史跡御土居のもみじ苑でもみじ狩りを楽しんだ。

当宮では日々増加する訪日観光者に対して、神道や日本の文化に対する理解を深めてもらうべく外国語に対応できる北野インフォメーションガイドの設立や、英語表記の看板を設置するなど、参拝者全員が快適にお参りできるよう日々様々な取り組みを行っている。

立命館大学学生 ボランティアガイド実施
学生の案内で北野天満宮参拝

地元立命館大学の学生によるボランティアガイドが、十二月八日実施され、同大学学生およそ百人が、学生ガイドの案内の下、当宮に参拝した。

当宮では、立命館大学学生ボランティアガイドに向け、当宮神職による講習を過去数回にわたり行っており、この日ガイドした学生は、そこで学んだことを生かし、堂々たるガイドぶりで境内を案内し、参加した学生ははガイドの説明に耳を傾けながら、参拝を行った。

立命館大学邦楽部奉納演奏
～夕闇に響く和の音色～

立命館大学邦楽部に所属する学生による邦楽奉納演奏が十二月八日、紅梅殿にて行われた。

当日は時折雨が降る等あいにくの空模様であったが、参加した学生二十六人が琴や尺八、三味線を用いて五曲を披露し、幽玄な音色が観覧者を雅な世界に誘った。

北野天神太鼓会奉納演奏
仁和小太鼓クラブと共に合同演奏も

当宮もみじ苑恒例の奉納行事、北野天神太鼓会による奉納演奏が今回も盛大に催され、「一心」「三宅」「対流」をはじめ様々な楽曲を力強く演奏し、参拝に訪れた人々は勇壮な音色に聴き入った。

十一月二十三日、三十日、十二月七日には日ごろ太鼓の指導に赴いている地元仁和小学校の太鼓クラブと合同での奉納演奏が催され、子供たちと息の合った演奏に観覧者の拍手が鳴りやまなかった。

「ものづくりtenmangu」開く

「ものづくりTenmangu マルシェ」が十一月三日、右近の馬場西の広場で開催された。各地で手作り市を開いている「ものづくりCross road」（山中陽太代表）主催により、当宮では十回目の開催となった。

アクセサリーや木工品、革製品といった手芸品や、菓子やパン、コーヒー等の食料品などなど、一つ一つ丹精込めた手作りの品々が並んだ店が広場に百十を超え出店し、キッチンカーや地元上京区からの出店コーナーも設けられた。午後からはアコースティックギター等が奏でられる音楽のライブイベントも行われ、大勢が聴き入っていた。

当日は雲一つない快晴となり、当宮参拝者やもみじ苑来苑者らが次々立ち寄り、終日大変な賑わいを見せた。

玲月流の篠笛奉納
初代奏者森田玲氏と弟子ら

玲月流初代の篠笛奏者、森田玲氏とその弟子らによる篠笛奉納が十一月二十四日、紅梅殿で行われ、紅葉狩りの参拝者らが足を止め、聴き入った。

篠笛は、古来から日本に伝わる横笛で、玲月流の篠笛は祭囃子の指使いと呼吸法を基本とし、清らかで透明な表現が魅力。拠点の京都を中心にファンが増えている。

この日は、玲氏と篠笛奏者の妻香織さん、弟子らが「ささら」「秋の音」などの曲を披露した。玲氏の独奏、太鼓が入る賑やかな曲もあり、時折解説も加わって聴衆を楽しませた。

山本秀夫氏 ドラムの奉納演奏
熟練の技で観衆を魅了する

ドラム奏者山本秀夫氏による奉納演奏が、十一月十六日紅梅殿にて行われ、多くの参拝者を魅了した。

山本氏はジャズミュージシャンとして、またスタジオミュージシャンとして数多くのアーティストのライブやレコーディングに参加するトッププレイヤーである。今回の奉納は長年の演奏活動における神恩感謝として、文化芸能の神さまである菅公へ奉納演奏をしたいとの思いから実現した。

当日はドラムソロや、バックミュージックに合わせた演奏の二曲を披露し、集まった観客から盛大な拍手喝采を浴び、大盛況であった。

祭事暦（1月1日～3月31日）

［1月］
- 1日 午前7時　歳旦祭（中祭式）
- 2日 午前9時　筆始祭 天満書（午前10時）
  - 神前書初め（4日まで）
  - 家庭書初め（5日まで受付）
- 3日 午前9時　元始祭
  - 奉納狂言（午後1時）茂山忠三郎社中
- 5日 午前9時　新春そろばんはじき始め
- 7日 午前9時半　若菜祭
- 9日 午前10時　摂社白太夫社例祭
- 14日 午前10時　末社伴氏社例祭
- 15日 午前10時　月次祭 御粥祭 成人祭
- 17日 午後4時半　神社役員新年奉饌
- 25日 午前9時　月次祭
  - 午後4時　夕神饌
  - 初天神
- 26日 午後3時　書初め「天満書」授賞式

［2月］
- 1日 午前10時　月首祭・斎祭
- 2日 午前10時　節分祭
  - 北野追儺式（午後1時）
  - 追儺狂言 茂山千五郎社中
  - 日本舞踊 上七軒歌舞会奉納
  - 豆撒き
- 4日 午前10時　霞祭
  - 摂社地主社霞祭
- 6日 午前10時　末社稲荷社初午祭
- 11日 午前9時半　紀元祭
- 15日 午前10時　月次祭
- 23日 午前9時半　天長祭
- 24日　参籠
  - 午後4時　梅花祭前夕饌
- 25日 午前10時　梅花祭（中祭式）
  - 午後4時半　夕神饌
  - 野点茶会（午前10時）上七軒歌舞会奉仕

［3月］
- 1日 午前10時　春祭（大祭式）
- 12日 午前10時　摂社老松社例祭
  - 摂社福部社例祭
- 15日 午前10時　月次祭
- 21日 午前10時　春季皇霊祭遥拝式
  - 摂末社春季祭
- 23日 午後3時半　梅風祭
- 25日 午前9時　月次祭
  - 午後4時半　夕神饌
- 27日 午前10時　摂社宰相殿社例祭

月釜献茶（1月1日～3月31日）

［1月］	1日	献茶祭保存会	休会	（明月舎）
	15日	献茶祭保存会	北野宗道	（明月舎）
		松向軒保存会	奥水宗津	（松向軒）
	19日	梅交会	泉恵会	（松向軒）
	26日	紫芳会	休会	（松向軒）
［2月］	1日	献茶祭保存会	田中宗眞	（明月舎）
	9日	梅交会	松向会	（松向軒）
	15日	献茶祭保存会	松山宗泉	（明月舎）
		松向軒保存会	今川宗惠	（松向軒）
	23日	紫芳会	布施宗青	（松向軒）
［3月］	1日	献茶祭保存会	藤原宗順	（明月舎）
	9日	梅交会	濱内宗厚	（松向軒）
	15日	献茶祭保存会	長島宗里	（明月舎）
		松向軒保存会	杉山宗喜	（松向軒）
	23日	紫芳会	土屋良佐・井田宗美	（松向軒）

正式参拝された皆様（敬称略）（十月～十二月）

- 十月　一日（火）　奉行会・北野祭保存会・神若会
- 十月　四日（金）　奉行会・北野祭保存会・神若会
- 十月　八日（火）　山陽盃酒造株式会社
- 十月　十三日（日）　ぺたほめお絵描きコンテスト
- 十月　十六日（水）　刀剣プロジェクト
- 十月　十八日（金）　一般社団法人日本能率協会
- 十月　二十日（日）　刀剣プロジェクト
- 十月　二十日（日）　上京 de 婚活
- 十月　二十一日（月）　全国天満宮梅風会展覧会関係者
- 十月　二十一日（月）　京都ロータリークラブ43会
- 十月　二十二日（火）　矢上神社
- 十月　二十二日（火）　鶴岡八幡宮
- 十月　二十二日（火）　天台宗神奈川教区
- 十月　二十三日（水）　奈良県神社総代会奈良添上連合支部
- 十月　二十五日（金）　北野天神太鼓会
- 十月　二十六日（土）　アマン京都団体参拝ツアー
- 十月　二十九日（火）　鶴岡八幡宮
- 十一月　四日（月）　風月会
- 十一月　六日（水）　鶴岡八幡宮
- 十一月　八日（金）　神宮研修所
- 十一月　十六日（土）　山木秀夫氏 他
- 十一月　十七日（日）　露の五郎兵衛一門
- 十一月　二十日（水）　京都連歌の会
  - 第43回世界連邦平和促進
  - 全国宗教者・信仰者京都大会
- 十一月二十一日（木）　北野神社
- 十一月二十四日（日）　京都産業大学下出ゼミ
- 十一月二十五日（月）　ヒラリー・クリントン氏
- 十一月二十六日（火）　篠笛・玲月流
- 十一月二十七日（水）　株式会社 白鳳堂
- 十一月二十七日（水）　桜井市自治連合会
- 十一月二十七日（水）　北野天神太鼓会
- 十一月二十七日（水）　親友会グループ
- 十一月二十七日（水）　島津製作所
- 十一月二十七日（水）　梅の会
- 十一月二十七日（水）　長岡天満宮奉賛会
- 十一月　三十日（土）　巫女奉仕者研修
- 十二月　七日（土）　大阪府私立小学校連盟算数部研修会
- 十二月　八日（日）　京都紙商燈籠保存会
- 十二月　八日（日）　立命館大学邦楽部
- 十二月　巫女奉仕者研修会
- 十二月　十日（火）　みずほ証券
- 十二月　十三日（金）　北野商店街振興組合
- 十二月　十四日（土）　茶道フェスティバル
- 十二月　十七日（火）　京都府神社庁役員会
- 十二月二十五日（水）　北野天神太鼓会

挙式された皆様（十月～十二月）

- 十月　十三日（日）　杉本 紘一・遥奈　ご夫婦
- 十月　十九日（土）　七田 祐・悠歌　ご夫婦
- 十一月　四日（月）　川岸 雅卓・美穂　ご夫婦
- 十一月　七日（木）　アウトリッジ ボー・芹奈　ご夫婦
- 十二月　七日（土）　小西 貴博・彩香　ご夫婦
  - 荻野 聖也・明日香　ご夫婦

新郎新婦様、御両家の皆様の末永いご多幸をご祈念申し上げます。

献詠　濱崎加奈子選

菅公は詩歌に優れ、多くの名歌を詠われました。室町時代には「和歌の神」と仰がれ、さらに柿本人麻呂と山部赤人と並んで「和歌三神」と称えられています。

十月「鈴虫」

荒壁のねぐらになくや鈴虫の
　うつろふもののみな美しき　京都市　服部満千子

夜籠りを盛りとぞ鳴く鈴虫の
　音色激しき社の森に　京都市　若狭　静一

鈴虫の菊の下にてなく夜に
　重ねるしとね寿かさぬ　京都市　塩小路光胤

月の下読書するわれ鈴虫か
　耳をすませばこほろぎも来む　京都市　小山　博子

鴨川を越ゆれば虫のすだくなり
　松虫鈴虫蟲斯かな　東京都　白石　雅彦

野にあれば鳴きたりと聞く鈴虫の
　籠中にあれば泣くと聞ゆる　京都市　朝比奈栄子

空ろなる籠に鈴虫の声すなり
　竹籤けづる祖父ぞしのばゆ　京都市　田口　稔恵

【評】
鈴虫は、古く「松虫」と呼ばれ、松虫は「鈴虫」と呼ばれるなど、混同されることも。源氏物語「鈴虫」巻名は、女三宮と光源氏の歌「おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたきすず虫のこえ」「こころもて草のやどりをいとへどもなほすず虫の声ぞふりせぬ」による。

十一月「幻」

饗の原恭仁のみやこはいづかたぞ
　よしや幻訪ふよしもがな　京都市　服部満千子

献杯のグラスは父のお下がりで
　十三回忌の斎の幻　京都市　若狭　静一

認知症すこしすすみし我母は
　幻見たとつぶやくことも　兵庫県　村島　麗門

空わたる雁のゆきすぐ秋の野を
　来る友うれし幻かとぞ思ふ　京都市　塩小路光胤

雪光り青空晴るる京かな
　天は幻都を護りて　京都市　小山　博子

誰ぞ彼行き違ふ人は幻か
　故人となりし友の面影　東京都　白石　雅彦

ありし日のわれは幻今は早
　けふのわれとて明日は夢人　京都市　朝比奈栄子

もののふに姫公達の枕辺を
　訪ふては語る海の幻　長岡京市　智野利恵子

ある人もあらざらむ人もひとしなみ
　山の端そむる明けの幻　京都市　田口　稔恵

【評】
源氏物語の巻名としての「幻」は、光源氏が紫の上を思い詠んだ歌「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ」による。第一帖「桐壺」で、桐壺帝が亡き桐壺更衣を詠んだ和歌「尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」に呼応する。

十二月「橋姫」

橋姫の物狂ほしや我もまた
　心音気づく君あらまほし　京都市　若狭　静一

ふけぬれば川風さむき橋姫の
　衣手さそふ人のありしか　京都市　服部満千子

橋姫の健気な手向けの池飾り
　花枝毎に評判流るる　京都市　小山　博子

橋姫の云はれはあまた聞こゆれど
　いづれ悲しき宇治の河波　東京都　白石　雅彦

橋姫の心は知らずわが夢は
　渡りなづみて岸に佇む　京都市　朝比奈栄子

橋姫に願ひをかくる人もなし
　宇治の社に枯れ葉のみ舞ふ　長岡京市　智野利恵子

川風に頬を打たれて誇らかに
　君を待つらむ我ぞ橋姫　京都市　田口　稔恵

【評】
橋姫伝説は全国に見られるが、宇治川の宇治橋が有名。橋の守護神として祀られており、嫉妬深い神とされる。源氏物語の巻名「橋姫」は薫が詠んだ和歌「橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる」による。

●献詠奉納についての問い合わせは、北野天満宮献詠係までご連絡ください。

天神さん 思い出写真館

昭和五十二年（一九七七）春斎行の菅公御神忌千七十五年半萬燈祭において御本殿前特設舞台で奉納された〝維新勤王山国隊〟による鼓笛演奏風景である。

山国隊は、幕末期、皇室との縁が深かった丹波の国山城郷〈現京都市右京区京北〉で組織された農民義勇軍。戊申戦争に官軍として従軍し幕府軍に勝利した。訓練場所が当宮近くの茶畑だったことから当宮への信仰心は篤く、明治二年には石灯籠を奉納している。

維新当時の山国隊の姿は、地域の人たちで組織する軍楽保存会によって受け継がれており、当宮への参拝・鼓笛奉納は、この後、御神忌千百年大萬燈祭（平成十四年）、明治維新百五十年記念（平成三十年）へと続く。

この写真に戻ろう。「官軍 山国隊」の旗を先頭に今出川通から上七軒通を行進し、境内を一巡した後、特設舞台で「ぴーひゃらどんどん」のおなじみの笛・太鼓の演奏を披露し、代表者による玉串拝礼も行われた。

舞台の周囲では多くの参拝者が見守っており、当宮と山国隊との関係を知らない人は、さぞ驚かれたことだろう。

天満宮歴史の一齣

森幸庵とその作成地図

京都大学名誉教授
藤井 譲治

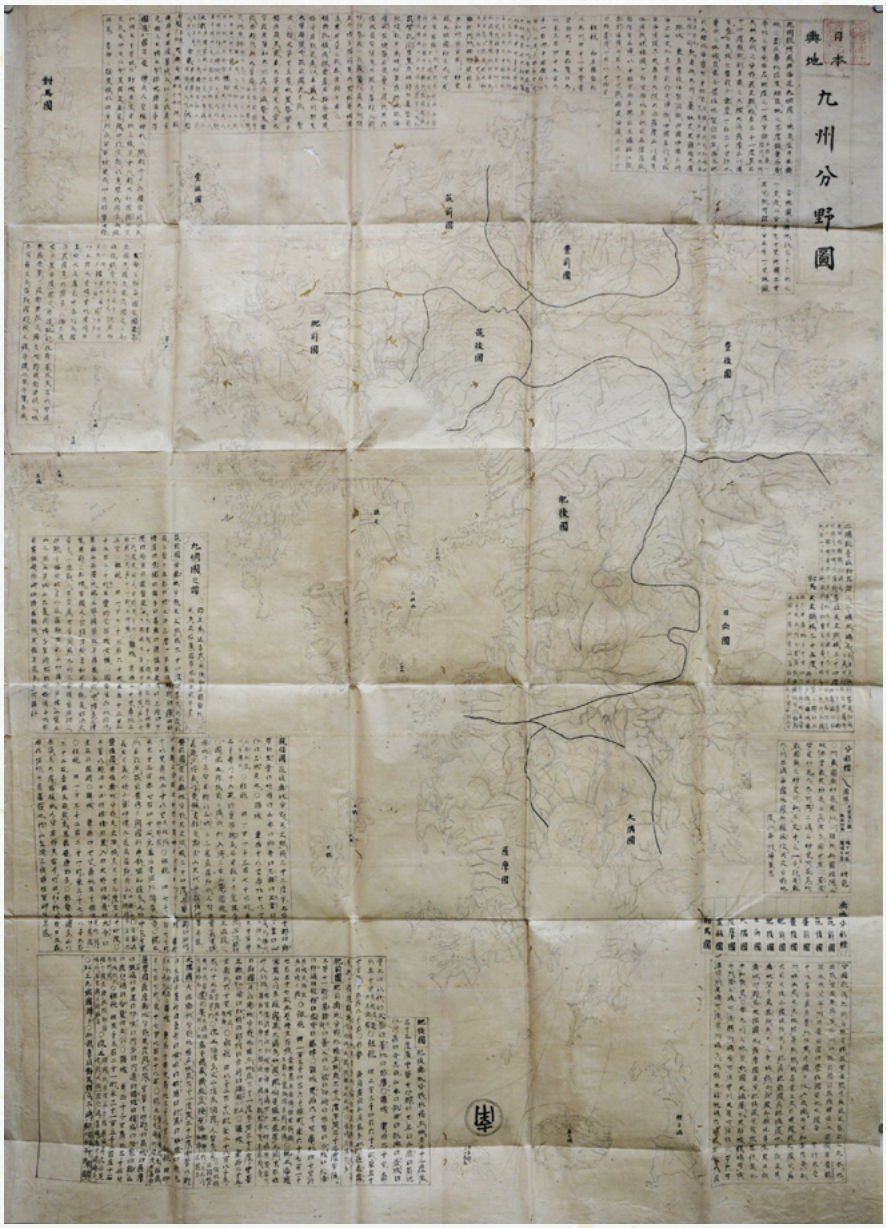
森幸庵は、元禄一五年（一七〇一）年京都で生まれ、二一歳ころに叔父が経営する香具屋を継ぐが、享保一四年（一七二九）三〇歳で隠居し、伏見、そして大坂に住み、地図作成を始めた。幸庵の地図には、いわゆる地図情報だけではなく、さまざまな歴史情報が書き込まれている。長久保赤水や伊能忠敬よりは少し前の地図作成者である。

幸庵の作成した地図は、天文、世界、東アジア、日本、五畿七道、各国、各町村、各神社仏閣、名所など様々であるが、それらは日本図を中心に階層的構造をもって作成されている。

なかでも「日本分野図」は、経緯を日本で最初に引いた地図として注目されている。

幸庵作成の原図は国立国会図書館の二二二点、ついで当宮の一一五点、その他と合わせて三六七点が知られている。当宮所蔵の図には「日本」全体を描いたものはないが、「五畿七道」のうち「日本輿地畿内輿地図」と「日本輿地九州分野図」がある。この両図とも経度・緯度を図中に引いてはいないが、「九州分野図」の冒頭「九州説」の識語には、図する所、西海道九個の地は日本輿地のうちの西に当たる、南北の経度は地の三度余に相亘れり、東西は南北の半分をたもって、地度の一度半余におよべり凡そ九州の分野、天文極を距てること三十一度より三十四度余に至る」と経緯線についての知見が記され、森幸庵が経度・緯度についてかなり深い知識を持っていたことを示してくれる。

この地図には、「九州記」のほかに「距域」「租税」「筑紫記」「国造・国司」「二島説」「分彩標」「分国説」、各国の概要を述べた「九個国之譚」の記載がみえる。



「九州分野図」　縦 135.5cm ×横 97.0cm

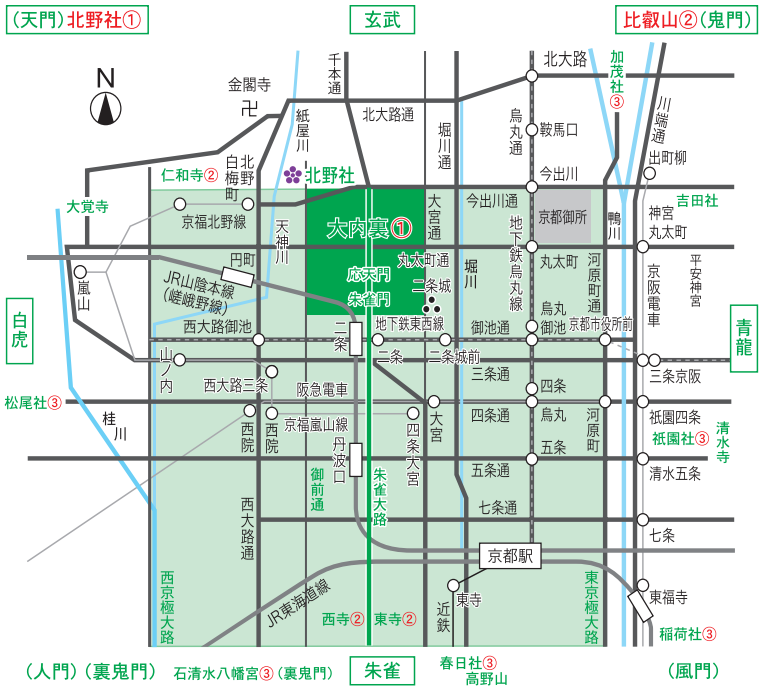
天神信仰の主な歴史

（注）歴史事項　北野天満宮事項　伝説事項

菅公薨去後、およそ百年かけて醸成され千年受け継がれる天神信仰

承和	十二年	八四五	菅原道真公（菅公）御誕生（父 是善 母 伴氏）　父 是善との親子の契り
斉衡	二年	八五五	初めて詩「月夜に梅花を見る」を作る　（菅公十一歳）
貞観	元年	八五九	菅公元服　文章生を目指し勉学　菅公 石清水八幡宮参拝
貞観	四年	八六二	文章生の試験に合格　（菅公十八歳）
貞観	八年	八六六	比叡山延暦寺円仁の『顕揚大戒論』の序文を書く
貞観	九年	八六七	文章得業生となる　（菅公二十三歳）
貞観	十二年	八七〇	方略試（当時最高の国家試験）に合格　（菅公二十六歳）
			この間少内記（詔勅の起草係）式部少輔など任ぜらる（菅家廊下を継承）
仁和	二年	八八六	讃岐守に任ぜられる　（菅公四十二歳）
仁和	四年	八八八	〈阿衡問題〉につき藤原基経に意見書を送る　（菅公四十四歳）
			これにより宇多天皇に挙用され政治の刷新を図ると共に平安京文化の礎を築く
寛平	四年	八九二	従四位下『三代実録』『類聚国史』の編纂に着手
寛平	五年	八九三	参議・式部大輔・左大弁を経て勘解由使長官
寛平	六年	八九四	遣唐大使に任ぜらる　（菅公五十歳）
寛平	七年	八九五	渤海客使を接待し詩を交換　中納言従三位
寛平	九年	八九七	正三位に叙し中宮大夫を兼ねる
昌泰	二年	八九九	菅公右大臣に任ず　位人臣を極める
昌泰	三年	九〇〇	『菅家文草』『菅相公集』『菅家集』を献上す（三善清行、菅公に辞職を勧告）（菅公五十五歳）
延喜	元年	九〇一	一月二十五日大宰権帥に左遷される　大宰府南館で謫居の日々（菅公五十七歳）
延喜	三年	九〇三	詩集『菅家後集』を京の紀長谷雄に送る　天拝山で「天満大自在天神」となる
			二月二十五日　配所において薨ず　（菅公五十九歳）
延喜	五年	九〇五	味酒安行　大宰府の御墓所に祠堂を建てる（現在の太宰府天満宮）
延喜	六年	九〇六	門弟許され　京の都西ノ京にて菅公神霊を祀り始める
延長	元年	九二三	菅公を元の右大臣・正二位に叙し　左遷の宣命を破棄す
天慶	五年	九四二	多治比文子　比良宮神官の子太郎丸らに神託（朝日寺の僧 最鎮）
天暦	元年	九四七	村上天皇により平安京の天門北野に鎮座す
			村上天皇御鳳輦御寄進
天暦	三年	九四九	村上天皇勅命により難波宮の地に菅公神霊を祀る（現在の大阪天満宮）
天徳	三年	九五九	右大臣藤原師輔　北野の神殿を増築し神宝を献ずる
寛和	二年	九八六	慶滋保胤「文道之祖詩境之主」の願文を草す
永延	元年	九八七	一條天皇より北野社官幣に預り「北野天満大自在天神」の神号を賜る
			北野社は官幣社となり勅祭北野祭が斎行される（江戸末期迄）
			一條天皇御鳳輦御寄進
正暦	四年	九九三	左大臣・正一位　次いで太政大臣を追贈される
寛弘	元年	一〇〇四	一條天皇初めて臣下を祀る北野社に行幸　以後歴代天皇の行幸に与る
永保	元年	一〇八一	北野社が国家の大事を祈る二十二社に臣下で異例の加列
康和	三年	一一〇一	大宰権帥大江匡房により大宰府・安楽寺にて神幸式大祭が斎行される
建久	五年	一一九四	『北野天神縁起』建久本成る
承久	元年	一二一九	『北野天神縁起』承久本成る
応永	八年	一四〇一	北野経王堂成る
応仁	元年	一四六七	室町幕府の崇敬で「北野祭」隆盛を極めるも応仁の乱より途絶える
天正	十五年	一五八七	「北野大茶湯」を豊太閤・千利休居士ら催す
慶長	八年	一六〇三	出雲阿国が北野境内で初めてややこ踊り（歌舞伎踊り）を公演（歌舞伎発祥）
慶長	十二年	一六〇七	豊臣秀頼公　北野社社殿を造営する（慶長の大造営）
			後西天皇御宸筆 勅額「天満宮」御寄進（三光門掲額）
江戸年間		後期	北野をはじめ太宰府・大阪・湯島など主要な天満宮に「和魂漢才碑」建立
元治	元年	一八六四	勅命により北野祭臨時祭再興
慶応	四年	一八六八	神仏判然令（神仏分離）により　天台宗比叡山延暦寺のもと
			社務を統括していた曼殊院との凡そ千年間に亘る神仏習合が終わる
明治	四年	一八七一	北野天満宮 臣下で異例の官幣中社となる
			太宰府天満宮 国幣小社となる（のち官幣中社）
明治	三十五年	一九〇二	菅公千年大萬燈祭を斎行する
昭和	二十七年	一九五二	菅公千五十年大萬燈祭を斎行する
平成	十四年	二〇〇二	菅公千百年大萬燈祭を斎行する
令和	二年	二〇二〇	例祭（かつての北野祭）斎行に伴い　比叡山延暦寺と共に北野御霊会を再興
令和	九年	二〇二七	菅公千百二十五年半萬燈祭を斎行予定

今昔マップ



◆北野社創建（平安時代）至現在
◆現在の京都

□ 平安京全域
■ 平安宮 大内裏

注①　国都平安京大内裏で千百年間天皇の祭政が執行され、日本文化が育まれてきた。

注②　平安京・大極殿の天門に北野、鬼門に比叡山、宇多天皇創建の仁和寺などが精神的中心となって熟成の礎となった。

注③　八幡さま、稲荷さまを始め多くの神仏は国都平安京（元の国都平城京）の近畿より全国に伝播。

天満宮
［第四十二号新年号］令和七年一月一日 編集・発行／北野天満宮 編集責任者／橘 重史 〒六〇二―八三八六 京都市上京区馬喰町 電話 〇七五―四六一―〇〇〇五(代表) http://kitanotenmangu.or.jp/

紅梅殿結婚式

日本文化の発信地、紅梅殿からはじまる家族の日

貞観元年（八五九年）菅公が十五歳の元服の折、母君は菅公の前途を祝し、

『久方の月の桂も折るばかり
家の風をも吹かせてしがな』

の和歌を詠み励まされました。

我が国で最初に家風を表されたのが、菅公の母君であったと伝えられています。立派な家風をもった稔り多い豊かな家庭を築かれますようにとの願いをこめて、菅公邸宅ゆかりの紅梅殿での神前結婚式から新しい「家族」がはじまります。

梅の枝「思いのまま」

元旦から授与――

◆頒布開始　令和七年元旦より
◆初穂料　一本 一〇〇〇円
（但し、無くなり次第頒布終了）

千五十年大萬燈祭（昭和二十七年）の初天神で参拝者に授与していた経緯より、約六十年ぶりに授与を復活させた招福の梅の枝「思いのまま」。

「思いのまま」には、菅公を偲ぶ梅花祭で御神前に供える特殊神饌の調製に用いる厄除けの玄米が入ったヒョウタンを取りつけ、家庭に春の訪れと幸せを呼んでほしいとの願いを込めている。

招福厄除けの社 北野天満宮の節分祭

◆節分特別授与品の頒布

〈初穂料〉

●福豆の授与（三種類）　各一袋　二〇〇円
●災難厄除箸の授与（数に限りあり）　八〇〇円
●災難除の御札守・銀幣の授与

災難除の御札	一体　三五〇円
災難除の御守	一体　三五〇円
銀幣	一体　九〇〇円

御縁日 境内ライトアップ

毎月25日は天神さんの御縁日。
境内特別ライトアップ！

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。

右記ＱＲコードを携帯電話やスマートフォンで読み込むと北野天満宮の最新情報にアクセスできます。上記の各ＳＮＳでもご案内しております。

●アクセス

名神高速道路南インター又は東インターより約30分
第二京阪道路鴨川東インターより約20分
JR京都駅より市バス50系統
JR・地下鉄二条駅より市バス55系統
JR円町駅より203系統
地下鉄今出川駅より市バス51・203系統
京阪出町柳駅より市バス203系統
京阪三条駅より市バス10系統
阪急大宮駅より市バス55系統
阪急西院駅より市バス203系統
京福電車白梅町駅より徒歩5分
いずれも北野天満宮前下車すぐ

●参拝時間

■7時～17時
但し、毎月25日（御縁日）は6時30分から20時
※青もみじ苑・もみじ苑・梅苑「花の庭」のライトアップ期間や正月等は夜間も開門しています。最新情報はホームページ等のお知らせ記事をご覧ください。
■文道会館・授与所　受付時間　9時～16時30分

●御祈祷

■受付時間　9時～16時
■受付場所　御本殿東側授与所

●駐車場

毎月25日は、御縁日のため駐車できませんので公共交通機関でお越しください。